

俳句雑誌

令和八年七月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十九巻第七号

水 明

2026 7月号



《今月のかな女》

晝寝して宇治と思ひし我家かな

『龍膽』所収 大正七年

長谷川かな女

この句は、かな女が三十一歳の時のもので、翌年左足首を捻挫して不自由な身体になる前なので、何となく健康な雰囲気を感じられる。

俳句の内容は、かな女の日常の一齣と思うが、庭からの風が通る部屋で心地よい昼寝をしていて寝覚めた時、自分が宇治に居ると錯覚したという句意である。宇治と言えば、平等院や鶴飼、そして、風味の佳い宇治茶など、特異性のある土地である。なぜ宇治と思ったのかは判らぬが、若しかすると、宇治川の畔で涼をとっている夢を見ていたのかも知れない。

(鬼之介・註)

今月の巻頭句

季音雪

少年の夢はパティシエ夏蜜柑

内田恵子

季音月

卯月ともなれば田毎の月を見に

正木萬蝶

季音花

羅にきりりと博多通し柄

梅澤輝翠

水明集

酔ひ痴るる昭和歌謡や春の宵

倉田星歩

鼓笛集

囀に夢の解け行く朝ぼらけ

丸屋詠子

山紫集

オーウエルの一九八四蝌蚪の国

檜鼻ことは

水明

令和 8 年
7 月 号

今月のかな女

今月の巻頭句

各々方(作品)

まだ来ない(近詠)

藤波(近詠)

百尺竿頭※主宰作品の鑑賞

ゆずり葉※季音月評

季音「雪」(同人作品)

季音「月」(同人作品)

季音「花」(同人作品)

『水明誌』を繙く

現代俳句鑑賞

☆水明賞受賞者ノオト

○自選二十句

スポーティーなフットワーク

○自選二十句

これからも、言葉探しの旅を

山本鬼之介

網野月を

丸山マスマ

五明昇

檜鼻ことは

内田恵子
大橋廸代
梅澤佐江
ほか

正木萬蝶
松宮保人
青木鶴城
ほか

梅澤輝翠
越田栄子
渋谷きいち
ほか

内野義悠

網野月を

小林京子

網野月を

菅原真理

丸山マスマ



○自選二十句

王道を歩む俳句眼

俳誌望見

岡田 宣子

網野 月を

梅澤 輝翠

水明集

倉田星歩
皆川更穂

寺町知子
ほか

作品鑑賞

山本鬼之介

水琴窟 (五月号鑑賞)

池田雅夫

句集喝采

菅原卓郎

風声

63

山紫集

64

山紫集作品評

網野月を

68

鼓笛集

70

鼓笛集作品評

青木 鶴城

71

水明発展基金御礼

73

例会報・各地句会報

74・77

夏行案内・水明塾のお誘い

82

後記

題字・長谷川かな女 表紙・内田恵子 カット・福田千春

各々方

山本鬼之介

凱旋の将の気分ぞ薔薇の門

麻のれん乙に文豪記念館

折しもの雨と闘ふ水馬

父の日や今日も朝から時代劇
夏草の罨の出来映え「かも」を待つ
風^{かざ}雲^{ぐも}や青葉盛りの五稜郭
神主の沓のリズムよ青嵐
網元や鯨御殿の寂しき夏

まだ来ない夏の花

網野月を

この雨にまだ来ぬ人を苧環の花
破れ傘錦之介丈の太刀捌き
橋蔵の投げ銭拾ひ浮葉花
切傷に血の痕はなき赤薔薇
昼顔の風を報せて咲きにけり
夕顔や真夜過ぎてなほ瑞瑞し
言葉にしては詮無きものよ蔦の花

七月号の近詠のテーマは「夏の花」である。「夏の花」のテーマで、この両頁を飾ることにしたのである。ひと言付け加えると大川橋蔵と萬屋錦之介は私にとって夏の花なのである。

閑話休題。

今から二十三年前、池田澄子さんの引合せで桑原三郎さんと一緒に句会に参加することを得た。数か月後、句会後の食事会で隣同士となった。その折、三郎さんから「大丈夫、一生下手なままやる手があるから」と慰めて頂いた。シヨックだった。半世紀以上も俳句に取り組んで来て、少しばかり出来るつもりになっていた矢先だったのだ。今はその箴言は、私の座右の銘となっている。

藤波

丸山 マスミ

切岸に揺るる紫藤の花
池の面に藤波匂ふ浜離宮
藤波の香りも乗せて川下り
銀山の遺構隠せり藤の花
昨夜の雨乗せて藤波しぶき揚ぐ
藤波や匂ふ大津絵藤娘
絡み付き城壁上る藤の花

藤の花は私の大好きな花の一つである。

猫の額ほどの狭い我が家の片隅に藤棚がある。浄土真宗の敬虔な信者であった母が、鉢植えの藤を購入し何年か鉢で楽しんだ後、庭に下したのが大きくなり藤棚を造った。母が藤をこよなく愛したのには、どうも本願寺の御紋が「下がり藤」であることと関わりがあるようだ。春爛、藤が花を咲かせる。品の良い甘い香りが漂う。母を想う。

しかし、何処からか熊蜂がやって来て、人が藤棚に近づくとブーンと大きな羽音を立てて威嚇する。

藤は生命力の強い樹木で、手入れをしないと何処までも伸びいろいろな物に絡み付く。時には、絡み付いた樹木を枯らすこともある。因みに、花言葉は、優しさ、歓迎、絆など。

百尺竿頭

● 主宰作品の鑑賞

五明昇

四月号

春を告げたる老舗旅館の大振り

老舗旅館といえば富士屋ホテル、日光金谷ホテル、万平ホテル、川奈ホテル、奈良ホテルなどを思い浮かべるが、ロビーに置かれた木製の振り子時計が「ボンボン」と春を告げたのは何処だろうか。ガレリオの発明以来、長年にわたって時を刻み、時を知らせてきた振り子時計が今も現役として働き続けるさまは、まさに老舗と呼ぶにふさわしい光景だ。

江戸弁の語りさはやか針祭

針祭は一年間使って折れた針や錆びた針を各地の神社などで供養する風習で、東京では二月八日に浅草寺の淡島堂などで開催される。掲句は針祭から落語の「太鼓腹」へ想を飛ばした絶妙の一句。遊び尽した若旦那が鍼に夢中になり、幫間の一八に「打たせる」と迫る場面を軽妙でテンポの速い江戸弁で語る高座は、古今亭志ん朝十八番の一つである。

紅梅のさ枝に触るる巫女の袖

梅花祭は、菅原道真公の命日である二月二十五日を中心に、

各地の天満宮で行われる恒例行事で、見頃を迎えた梅の花を神前に供え、巫女による優雅な巫女舞が奉納される。大宰府天満宮では巫女が冠に梅を飾り、「飛梅の舞」を披露、北野天満宮では上七軒の芸舞妓による「野点の茶会」と併せて賑かな巫女舞が演じられ、いずれも見逃せない春の風物詩だ。

通ひ路の池の蠢動日脚伸ぶ

冬に凍てつき、渇水した池が、春の雪解け水や春雨によって水量を増し、池のほとりに日差しが注ぎ、草花が芽吹き、蝶が飛び交い、池の中では小魚たちが泳ぎ回る……、作者の通ひ路にある池が蠢動を始めた。冬至を過ぎ、少しづつ日が長くなることを実感する晩冬の頃は、寒さの中にも春の気配を感じ、未来への希望や喜びがほの見える季節でもある。

会へず了了ひの祖父の遺影や冴返る

山本鬼之介主宰のお父上嵯迷氏は明治二十七年、沢本常次郎・みつ夫妻の三男（長男は沢本知水氏）として福井県遠敷郡鳥羽村（当時）に生まれ、一歳そこで隣村瓜生村の山本家の養子となった。祖父常次郎氏は昭和二年に他界されているので、同十三年生まれの主宰は会えずじまい。遺影を眺

めつつ一族の来し方を振り返る望郷の一句と見た。

五月号

芽柳や怪談噺まだ早し

怪談噺は、幽霊や化け物、死神などといった怪異を扱う落語の一ジャンルで夏の風物詩となっている。川岸で揺れるしだれ柳の姿が、額に三角巾をつけた白い着物姿の女性(幽霊)を連想させるため、古典的な怪談の舞台として頻繁に用いられるが、柳はまだ萌黄色の柔らかい新芽が芽吹き始めたばかり。芽柳は桜の季節に重なる春の代表的な景色で、おどろおどろしい怪談噺の登場には暫し間があるようだ。

春雨ぼつり祇園甲部に差し掛かり

祇園甲部は、京都市東山区(八坂神社周辺)にある京都最大の格式ある花街である。明治初期に開始され、京舞井上流の芸妓・舞妓が所属。春の「都をどり」や秋の「温習会」が有名で、祇園甲部歌舞練場を拠点に伝統的な街並みと技芸を継承している。春雨は三月下旬から四月頃に降るしっとりとした趣のある雨で、界限に差し掛かった作者の詩魂を揺さぶる一景となった。

盛り塩に惹かれ暖簾を春の宵

料理屋の店先に置かれる「盛り塩」は、店の入口を清め、悪い気を入れないための境界の役目を果たす他、良客を呼び

込む「招客」の願いが込められている。中国の始皇帝が牛車に乗って女性たちの元を訪れる際、ある女性が門口に牛の好物である「塩」を盛って皇帝を留めさせたとの逸話が今に伝わる。春の宵、盛り塩に惹かれて料理屋の暖簾をくぐる……、この小さなときめきを作者と共有したい。

軍記読みすぎ臙の庭に武者の影

軍記(軍記物語)は、鎌倉時代から室町時代にかけて書かれた歴史上の合戦を題材とした文芸のこと。武士の武勲や戦乱の様子を語り物として伝承しているが、虚構や誇張、説話的題材を交えて劇的に描いたものも多く、思わず引き込まれてしまう。読書に疲れた春の臙夜、庭前を過る武者の影は源為朝か、楠正成か、はたまた平敦盛か……、さまざまな想いが交錯する象徴的な一句である。

麗かや日に一便の飛行場

一日一便の空港では、北海道の「オホーツク紋別空港」が代表例。ANAが羽田空港との間で一日一往復(一本)のみ運航しており、日本テレビ「一日一便乗ってきました」でも放映された。地域住民の足や観光用として機能する一方、羽田・紋別間をとんぼ返りで利用する「紋別タッチ」が人気を呼んでいる。愛らしく小さな空港だが、スタッフの感謝の気持ちのこもった、温かみのある路線に春の日差しが快い。

ゆずり葉

◆季音五月

檜 鼻 ことは

下萌や野外演劇暮れなづむ

菊地ひろこ

野外演劇と言う言葉から、懐かしく思い出すのは唐十郎の紅テント。観劇したのは学生時代のことでした。

最近では、外波山文明率いる「椿組」の野外公演を新宿・花園神社で観ましたが、最近と言ってもかれこれ七年ほど前のことになりました。

野外演劇は、上演される場所の景色そのものも演出の一部となり、その土地の歴史や風景と結びつくことで、通常の劇場空間よりも、観ている者にとって参加している感覚が強くなるように思います。

句は美しい調べと共に、夕暮れがゆっくりと進み、まだ完全には暗くならない、その曖昧な時間帯、舞台と辺りの景色のすべてが溶け合っていく非日常の空間を静かに詠んでいます。

そして、「下萌」と「暮れなづむ」という二つの言葉により、始まりと終わりが交差し、はつきりと定まらない特別な時間の層が、静かな余韻として残り、野外演劇のその会場に身を置いているような感覚になりました。

まんさくに始まる陸奥の花暦

五明 昇

簡潔でありながら、その土地の時の動きを大きく捉えた一句です。「まず咲く花」―その名の通り「先駆け」としての意味を持つ「まんさくに始まる」の措辞が句の冒頭に据えられることで、「これから季節が動き出す」という期待感が自然に立ち上がってきます。続く「陸奥の花暦」により、視野は一気に陸奥という寒さ厳しい土地において、「花暦」がゆっくりと進んでいくという景が広がってゆきます。陸奥を旅されたときに詠まれたのでしょうか。東北の遅い春が静かに動き出す実感が、読み手にも穏やかに伝わってきました。

まんさくや村ゆつたりと動き出す

笹本啓子

こちらは、のびやかに、村の春の始動をやさしく捉えた一句です。

とても素直に景が立ち上がってきます。農作業の再開、外に出る人々の姿、煙がのぼる家々、具体的には語られていませんが、冬のあいだ静まっていた村全体が、少しずつ息を吹き返していく様子が感じられます。この句の魅力は、まんさくの開花を合図に、村と言う共同体全体が動き出すという広がりがあるように思います。風土の呼吸をそのまま言葉にしたような、温かみのある一句です。

春灯や老ハスラーの熱視線

池田雅夫

ポール・ニューマン主演の名作「ハスラー」を名画座で観たのは学生のころ。賭けビリヤードの世界に生きる若きハスラーの切ない物語でした。

その二十五年後を描いた続編は、かつて「ファースト・エディ」と異名をとった凄腕ハスラーもいまや頭に白いものがまじる歳となり、賭けビリヤードから足を洗っていますが、若きハスラーとの出会いにより、再びビリヤードの世界に戻っていくというところから物語は始まります。

この二つの映画のことをまざまざと思い出した一句です。「春灯」と「老ハスラー」の関係が、やや説明されないまま

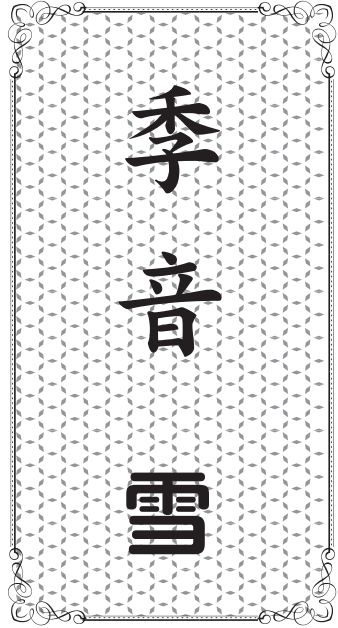
強くぶつかっているため、読み手にとっては景色と人物像が定まりにくい面もありますが、一方、この曖昧さは、やわらかな春の灯りの中に、濃い人間の欲や視線が潜んでいるという、少し妖しい空気を生み出しているように思います。名画「ハスラー」をもう一度観たくなりました。

お彼岸や苗字異なる三姉妹

新 曆文

今年の彼岸入り三月十七日でした。「彼岸」という言葉は、もともと仏教用語で「悟りの世界」を意味します。それに對し私たちが生きる迷いの世界は「此岸」と呼ばれています。太陽が真東から昇り真西に沈む彼岸の中日ははさむ彼岸は「あの世」と「この世」がもつとも通じやすい特別な期間として、古来より考えられていたようです。そのようなことから、先祖に感謝する、亡き人を偲ぶ、自身の生き方を見つめ直す意味を込めて、墓参される方が多いのではないかと思えます。

句からは、結婚によって姓が変わった姉妹たちが、久方ぶりに揃って墓前に集っている光景が立ち上がってきます。句は、「一見さりげない事実」を置いただけのようでいて、そこには時代と家族の物語がしっかり宿っています。「事実の提示」によって家族の時間を立ち上げた端正な一句です。お彼岸という場の力を借りながら、それぞれの人生を歩んだ姉妹たちの静かな再会を、余剰豊かに描いています。



夏 蜜 柑 内 田 恵 子

少年の夢はパティシエ夏蜜柑
 剣玉の世界一周夏蜜柑
 羽搏くぞ両手広ぐる麦の秋
 嘶きのかすかに聞こゆる秋
 ミモザの波あいまいとなる記憶

卯 波 梅 澤 佐 江

リラの花香り電話の余韻かな
 名刹の縁起に耽る薄暑かな
 さよならのひと言攫ひゆく卯波
 萍に雨のささやき水匂ふ
 蟻登りゆく万葉の恋の歌碑

観 海 閣 大 橋 廸 代

南吹く和歌三神の愛でし潟
 磯蟹や新楼閣に目をみはる
 奠^{てんぐやま}供山へ息はづませてみどりの日
 赤人も芭蕉も過客緑立つ
 千年の杉に抱きつく夏帽子

卯月 大場順子

五分咲 菊池ひろこ

巫女舞の白匂ひ立つ卯月かな
白神の風まだ硬き卯月かな
郭公のしきり邂逅よろこべば
朝摘みの苺ほほばる誕生日
若葉風写仏に耽るペンの先

五分咲へ黄の風おくる野の起伏
銅像の銅の扇や遠桜
違ふこととしてゐて団欒春の宵
春の宵短歌となりし走り書き
靴下を好みの色に花の雨

春の山 大村節代

武蔵野 五明昇

手を解き胸張り歩く入学子
かすかな風に反り身のわたし穀雨かな
掌に受けし金平糖や春の山
大空へ胸を張り吹くしやばん玉
白粥に紅き梅干菜種梅雨

牧開きはや風と化す駒の影
ピーカンの空に花丸こどもの日
竹百幹婆娑羅に揺らす青嵐
筈とごろり共寝の板座敷
武蔵野の一景焦がす麦の秋

祝 百 年 近 藤 徹 平

落武者の越えし峠や春の汗
「祝百年」の電光ニュース昭和の日
叢霞記憶は消えぬ拉致の浜
卯浪立つ遠流の君の隠岐の島
目高飼ふ児らの教室「起立礼」

緋 牡 丹 島 津 初 花

緋牡丹や若狭秘佛の面見上ぐ
多田が岳の懐染めり緋の牡丹
仏燈の洩るる古刹の庭牡丹
仏像の細き毗五月闇
散り際に音を残しぬ白牡丹

酔うてみる 境 延 昭

春満月電気ブランに酔うてみる
春暑し内科外来待合室
水茎の読めぬかな文字夏暖簾
卯浪立つ沖へ飛び発つ滑走路
藩学の名を継ぐ誉れ麦の秋

卯 月 鈴 木 康 世

卯月来ぬ顰絵に残る薄みどり
あはうみの光眩しき卯月かな
浮遊する湖港の街の卯月かな
ひさびさの潮の香に酔ふ五月かな
旅果ての湖畔の宿の一夜酒

みどりの日 十倉和子

女 帝 永野史代

妃殿下の木鋏かるやかみどりの日
流鏑馬にやんやんやよみどりの日
歓声あぐるトロッコ列車みどりの日
城垣は今も磐石樟若葉
発掘の瓦に記号百千鳥

穀雨かな農機具小屋を全開に
兄弟の蛸蚪つつき合ふ水たまり
一匹の女帝あるごとと蛸蚪の国
塙保己一の拓本を取る春の暮
藤の雨ひつそりと姉入院す

若狭の初夏 鳥羽和風

更紗木瓜 星野和葉

初緑まだ名の付かぬ新生児
記念樹の杭は墨の字若葉風
微風を羽織るが如く夏衣
へしこ焼く煙の旨し夏初め
柏餅食ぶる胃袋別に有り

名に合はず可愛い花よ更紗木瓜
花木瓜のするどき刺や立ち話
傘立てに大小の杖穀雨かな
青き踏む足びつたりのベビー靴
亀鳴くやがん検診を受けやうか

脚 力 町野 広子

一滴の水とて恵み竹の秋
夫在らば八十路半ばや辛夷咲く
平飼ひの鶏の脚力穀雨かな
青天や野に山吹の一重映ゆ
山吹もやはり一重がいいと母

風 便り 松井 由紀子

まざまざと夫の洗面夏みかん
遠雷の一手長考かげる街
風と競ふロードレーサー麦の秋
ばら十本机上の夫を笑はせる
草は草へ木は木へ夏の風便り

あいの風 丸山 マスミ

山吹のなだるる水路鯖街道
あいの風入船の灯の見え隠れ
岬廻りの船を遠見に夏蜜柑
風に乗る立ち漕ぎの足麦の秋
夏暖簾くぐる馴染の隅の席

瑪 瑠 茂木 和子

愛犬と寝転ぶシートクローバー
老人と喇叭飲みする缶ビール
夏霞沖をゆつくり貨物船
開幕のやうに晴れ行く夏霞
若狭瑪瑠の研磨工房時鳥

文殊堂 森川義子

早稲田大学・細川庭園界隈 網野月を

墨堤に演歌流るる花の宴
永き日の燭細くして文殊堂
境内の屋台解かれて花曇
花曇り遠野の里のかたりごと
澄み渡るみ空に凜と花水木

立像は緑雨に目鼻のくつきりと
メーデーの雨の雨粒数へけり
夏の池今朝のスープの色に似て
折り紙の兜の飾り花しやうぶ
白の罎に紅のしやくやく天気雨

石楠花 森本早苗

惜 春 石井喜恵

石楠花の谷独り占め昼の月
探険と称し遠出やみどりの日
未来永劫神戸輝く楠若葉
風薫る旧居留地のカフェテラス
花楓窓全開のハッサム邸

石庭の沙の静寂春深む
菜種梅雨朱の色重き曼陀羅図
稜線の翳る車窓や菜種梅雨
穀雨匂ふ下ろし立てなる庭の下駄
観音の面輪の愁ひ麦の秋

春 暑 し 石 山 かつ子

松の花粉は煙のやうに春暑し
春暑し裾にまつはる静電気
春暑し塔に鴉の動かざる
クラーク像の起伏の丘や緑射す
晚餐の船底揺らす卯波かな

☆ ☆

第25回
俳句四季大賞

片山由美子

『水柿』

第14回
俳句四季新人賞

加那屋こあ

- 第26回俳句四季全国俳句大会 結果発表
- 受賞作品・選評・選考座談会 を掲載
- 新人賞最終候補者発表

第9回俳句四季新人奨励賞

稲葉守大
押見げげば
柗木快維

第15回俳句四季特別賞

内村恭子『多神』

＊好評連載

伊野孝行
人はなぜ風景を描くのか

吉川千早
俳壇ランドスケープ

青木亮人
句の手触り、俳人の響き

大西朋
俳句へのまなざし

橋本喜夫
俳句のレトリック

藤村公洋
俳句のつまみ

神作研一
てのひらの江戸

堀田季何
古典籍を旅する

諸家書架
石井隆司

たもとほる
俳句よもやま話

山本潔
一望百里

＊2020 私の源流、
中島斌雄 麦・綾野道江



Haiku Shiki

2026年7月号

6月20日発売
定価1300円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

季音月

田毎の月

正木萬蝶

卯月ともなれば田毎の月を見に
 心字池の窪みの辺り亀鳴けり
 箔置きのかすかな歪み亀鳴けり
 藤の夕恋うてはならぬひとを恋ふ
 瓦斯灯や独り卯月の馬車道を
 心 眼 青木鶴城
 吾が運は六白金星夏の霧
 夏の星孤独を曳きて流れ落つ
 蜃気楼躁と鬱とのせめぎ合ひ
 青歯朶や弱気の虫に活を入れる
 心眼の衰へ知らず髪白し

薄 暑 松宮保人

船頭の案内巧みや川柳
 梅丈岳登りて里の春惜しむ
 大輪の散るを惜しまぬ牡丹寺
 格子戸を放つ薄暑や宿場町
 恐竜館出でてうつつや薄暑光

揺るる 日高道を

藤揺れてうすむらさきの風の色
 春霞舫ひの船の見え隠れ
 夏きざす五右衛門風呂の不安定
 徳兵衛が覗いてゐたり柳陰
 夕間暮れ波打ち際に浮袋

黴の温床 池田雅夫

鶏鳴の朗朗と明け易きかな
 啼鳥の千変万化青葉騒
 田に畑に風こそ薫れ小字村
 一面の梅雨雲村を押し潰す
 雨音は黴の温床古本屋

白牡丹 檜鼻 ことは

清明や山高帽の似合ふ人
何もかも空中浮遊木の芽時
行く春や名札を外す下足箱
雨似合ふ町もあるらし白牡丹
出雲路や桜葉降る木の駅舎

春霞 大塚 茂子

銅像の馬のたてがみ朝霞
水攻めの忍城浮かぶ遠霞
屠腹ありし飯盛山は春霞
春服や母の手作りワンピース
春の旅足取り軽く鯖街道

春霞 原田 秀子

蒼天に溶けこんで居り春霞
仙人も満腹の体春霞
かさかさと一粒万花種袋
フイトンチッド発散させて夏木立
燕の子おほくち競べ齒科の軒

春爛漫 飛永 鼓

菜の花やもつれもつれて蝶の恋
谷間の音を楽しみよもぎ摘む
針に糸すんなり通る若緑
春惜しむ夕餉の主役萌黄色
良き事の過ぐるは早し花曇

若狭の海 原田 自然

瑞鳥と目と目が合うて山笑ふ
一服の煙草うましや山笑ふ
海と湖コラボ楽しや山笑ふ
海水と汽水淡水山笑ふ
笑ふ山若狭の海は一張羅

八百姫 松島 寛久

この浮き世生まれ消えて石鹼玉
正座して敬佛と墨し春の行く
ヴィーナスの生命の息吹春の海
行く春や子らの写仏に風さやか
行脚果て八百姫たたずむ春の浜

夏きざす 河野 はるみ

萍の花汀に白くゆらゆらり
蔵の町紺が物言ふ夏のれん
青椒肉絲作るも食ふも玉の汗
亀鳴きて暖簾をくぐる時宜を得る
亀鳴くや月のうさぎが耳を立つ

橋詰の店 曲淵 徹雄

自転車と乗り込む渡し春うらら
春落葉娘洋装母和装
踏みつけて甲斐なき音の春落葉
江ノ電の煽れば踊る若柳
柳陰橋の袂の小商ひ

暮の春 荒井 俱子

曲り角一つ間違ふ朧の夜
仏像の結跏の膝に恋雀
鳥の恋神前なれど憚らず
歛入れて土の声聴く穀雨かな
三里の灸すゑに穀雨の街に出づ

亀の声 福田 千春

亀鳴くや逢魔が時の胸騒ぎ
亀鳴くと言ひし幼の添寝かな
門灯にひときは浮かぶ白木蓮
手びねりの茶碗のゆがみ柏餅
薫風に舞ふや匠の鉋屑

夏 鶯 西浦 千枝子

夏鶯に家を忘れしひと日かな
みどりの日ためらひもなくシルバーカー
一つ家に泳ぐ大きな鯉幟
山壁をうむる新緑神の山
霊峰の新樹ゆるがせへリコプター

草 笛 井上 玲子

葉桜となりし墨堤乳母車
草笛を上手に吹くよ童歌
草笛の音色の先の夕茜
菖蒲湯に心を満たす卒寿かな
首かしげ毒草かも山路かな

花の雨糸

熊倉千重子

卒業式送る教師の優しき眼
金沢城花の雨糸輝きて
花粉症バッグにティッシュと目薬と
花粉症途切れ途切れの電話して
物忘れ増ゆる昨今木瓜の花

牡丹咲く

田中章嘉

丹念に育てし牡丹満開に
豪雨にも耐へし姿で咲く牡丹
強風に樹木も衣裳ころもがへ
黄砂降る国境越えの砂の旅
藤棚に和歌の短冊風を呼ぶ

おがたまの花

松山清子

百態の子猫の仕種見惚れ居る
チンチンと都電の発車風薫る
おがたまの花の香の満つ百花園
近付けば鯉ひしめけり若楓
山深き湯の宿に着くみどりの日

静かな町

野口和子

この頃は季節先取り更衣
公園の人工小川芹の花
風薫る川風優しパーベキュー
月見草静かな町の静かな夜
アカシアや甘き香走る橋の上

弾む音色

保坂翔太

原生林の滴を束ね春の川
雨だれの弾む音色や春障子
鶯が関所を隔て鳴き交はす
火吹き竹遣ふ風呂焚き山笑ふ
イーゼルにとまる初蝶光る湖

風光る

横山君夫

臙なる林を抜ける貨車の音
藤房の揺れやまずして交差せず
隠れん坊隠れし顔を藤が打つ
春日傘たたみ吊橋渡りけり
逆転の弾丸シュート風光る

童歌 笹本啓子

初めての鍵持つ暮し新社員
穀雨なり槌音響く農具小屋
花林檎ふと口遊む童歌
花りんごお岩木山に雲はなし
花は葉に小暗くなりし並木道

のんびり 石田慶子

木の芽風今出航の波優し
不穏なり爪とぐ猫と蝌蚪の群れ
紅色の唇きりり新社員
残る鴨終のすみかで生きゆけり
春昼や友のおもたせ菓子と愚痴

子供の日 葛城千世子

みどりの日煮込みうどんに牡蠣油
おはよーのスタンプ音や今朝の夏
子供の日青の自転車さつさうと
いくたびも五目並べや子供の日
ハミングし浅蜷カレーのたつぷりと

風薫る 下川光子

つぎつぎと命とび出す燕の子
はつなつの空き家の軒にべー靴
休憩の屋上庭園風薫る
チューリップ幼子の口尖らせて
麦秋や埼玉人はうどん好き

☆ ☆

訃報

季音月欄作家 川崎道子様
去る五月二十三日ご逝去されました。
謹んでお悔やみ申し上げます。

季音花

羅 梅澤輝翠

羅にきりりと博多通し柄
秩父路の総開帳の弥生かな
萍のすき間をぬうて今朝の鯉
知覧新茶白磁に落とす翡翠色
ふくらみをリユックに詰めて新社員

初夏 洪谷きいち

初夏のざる一枚の至福かな
初夏や潜るのれんは神田藪
出不精の父でありしや神田祭
竹の子の地を割る疼き見付けたり
竹の子を探す足裏神の技

霞立つ 越田栄子

囀の中に鳥の名聞き分くる
肥沃なる大地の呼吸春霞
品種改良ここまで来たか物の種
無農薬育ちの力南瓜蒔く
里山の暮しの遅遅と夕霞

楽屋見舞 染谷風子

半眼の子安地藏を春落葉
表札に未だ母の名春落葉
三弦に昭和の余韻柳影
花まつり臉の奥に慈母の顔
悪役に楽屋見舞の桜餅

季移りゆく 菅原卓郎

隈取りのにらむ十八番や春暑し
飛車角を欠いて胸貸す春暑し
宜候と舐先分け入る卯波かな
起重機の天へそぼだつ街立夏
山祇の易きめざめや閑古鳥

早春 池田 珪子

托鉢の僧のたもとの露の臺
露味噌にするには足らぬ露の臺
田楽のよく練りてある味噌の照り
歛当たる小石の音の冴返る
遠山に雪の残れる野焼かな

禁酒解く 新 曆文

鯉幟のたり限界集落に
神田祭声高く澄み木遣り唄
極限の礼文知床夏に入る
筍や節目節目の祝ひごと
京都より筍届き禁酒解く

いのちつなぐ 寺内 洋子

万緑や胡座の子脛をもて余し
新緑や老木にも生命感溢る
葉桜の良さ知らぬまま老いにけり
万緑のはつかに隠す地震の跡
風は薫り鳩鳴く戦火絶えぬ世も

起死回生 野村 美子

遠雷や起死回生の一手打つ
瀬戸内の鬼が島へと卯波かな
尾道の細道上がる卯波かな
信濃路や里の畑の花林檎
津軽の里のりんごの花や岩木山

雪 洞 清水 桂子

雪洞のかすかに揺るる花の冷え
みどり児は並べてぐうの手春暑し
バス旅の走る先ざき花林檎
名刺入満杯にして新社員
電報の昭和遙かよ春の雷

若葉の候 山岸 久美子

葉桜の並木通りを鼓笛隊
葉桜や教会で聴くアベマリア
葉桜が招くミュージーズや奏樂堂
日溜まりにそよぐ若葉のうたをさき
菖蒲湯に子等の成長父の愛

藤の花

鈴木玲子

紅さをじつと見つむる子よ春よ
草臥れて四阿に聴く春の鳥
菊坂に一葉辿る白つつじ
藤たわわ平安の世の風よぎる
淡淡と藤房ゆるるお堀端

穀雨の候

森和子

「穀雨の候」忙しくなると爺の文
榛名山膨らみ始む穀雨かな
急坂を銀輪遅遅と穀雨かな
野火聞けるさぞや地蔵の熱かろに
野火消えて心静もる夕べかな

磯遊

山戸美子

釣果無く昆布拾ひて磯遊
磯遊夢中になりて足刺され
校長の注意長磯遊
強東風に我が踏んばりも力尽き
春暑し人力車夫のヒラメ筋

花りんご

西幅公子

制服の折目くつきり新社員
花嫁の白無垢けだし花りんご
創業者の像をじつくり新社員
少女らの制服光る弥生かな
まさか二階に零せし砂糖蟻の列

子供の日

宮崎チアキ

銅鑼の音の洋洋響き卯月波
熟年医師の降り立つ鳥や卯月波
「只今」と言へる家ある子供の日
子の巣立ち菖蒲湯の香の薄らかに
初夏や放牧牛の肉料理

花の風ぐるま

佐々木史女

緑雨受け花ひだをとく古代蓮
炎天やいのちなき砂鳴きにけり
肌癒やす木陰探すや炎天下
夏草や埋もれてゐたる墓石かな
蝸牛片陰見つけ葉のうらに

松の花 高橋 満耶子

指定席を取り合ふインコ緑の日
芝ざくら富士の裾野を華やかに
山染むる百万本の躑躅かな
ぜいぜいと息する夫や月隴
医師の言葉に目から鱗や松の花

歩行者天国 綿貫 ひさの

夏めくや草木勢ふ遊歩道
懸命に草食む仔牛夏の空
ほこ天に服の露出度夏きざす
時の日に億光年の宇宙観る
父の日や「今日はなんじや」と墓石から

弥生 野平 美紗子

弥生の空見上げつ思ふ遠き子を
春の曲選びて歌ふ弥生かな
窓閉ぢて虫の声聴く夕餉時
東北へ旅して出会ふりんごの花
新しきネクタイ締めて新社員

待 つ 小林 京子

猫脚の長椅子に居り隴月
門灯に人影待ちぬ宵の春
隴影髪しつぽりと小糠雨
青海波の皿を選ぶや桜鯛
当て所なく不忍池春終る

芍薬の花 菅原 真理

芍薬生け堆朱に白の零るるや
角曲がり春爛漫の裏路地よ
弥生満月静かに入江照らしをり
芍薬の崩るる午後の気怠さよ
見知らぬ街を歩くときめき花蘇枋

春 灯 岡田 宣子

二次会の新婦打解け春の燭
一室を照らす春灯定時計
庭に向く残る揺り椅子春眠し
病窓の横一面はたんぽぽ野
飛花落花白寿を前に母の逝く

著莪の花 岡本祥子

山峡の奥へ導く著莪の花
歲月や都忘れの残り株
快音や薫風に乗る速き球
カーナビに頼る迷路や夏霞
初夏の百選の水ほとばしる

早春の奥日光 霜多光代

空へ透くる春の葉脈瑞瑞し
みづならの樹間に映ゆる春の湖
遅桜の字カーブのいろは坂
小舟並め菖蒲ヶ浜の浅き春
湖の辺に鱒釣りらしき影二三

みどりの日 南條きわゑ

柏餅一ヶ食べれば腹一杯
酔ふほどに箸の進めり初鰹
こでまりを飾りて屋形人を待つ
みどりの日域に真向ひランチする
若人と話弾むやみどりの日

花水木 畑宮栄子

すくと立つ街のシンボル白木蓮
君の背に花びらひとつ自立する
外つ国は争ひばかり花水木
春の闇補聴器よりの水の音
春の闇時は昔に逆戻り

妖精の羽 森下美智枝

春服に妖精の羽舞ふ幼な
美味なるや夏炬だんごの醤油の香
太き美声の相撲甚句や夏きざす
春暁や待ちに待ちたる雨の音
草の芽の眠気を覚ますホームラン

野焼 湯浅和

落日のすたとんと落つる野焼中
野焼する関八州のへそに立つ
揚ひばりひとりぼつちの地藏尊
大空に点となりつつ鳴くひばり
菜の花や土手に親子の肩車

『水明誌』を繙く（水明四月号）

内野義悠（「俳句同人リブラ」「俳句ネブ」リメグルク「豆の木」所属）

捨てがたき天動説や初日の出 保坂翔太

人類は太古の昔に宇宙というものを認識して以来、永らく自らの住む地球こそがその中心であると信じ続けていた。

その世界観は天文学の分野のみに留まらず、宗教や文化など人間の精神性の基礎を為すものとしても、広く根強く我々の価値観の中に染み込んでいった。

中世ヨーロッパのキリスト教世界を中心に、この「天動説」を否定したものは異端とされ、それに伴い多くの命も喪われたが、そのような負の歴史をも乗り越えてついに人類は「地動説」という真理に辿り着いた。

だが掲句は否定されたはずの天動説に後ろ髪を引かれている。祝祭性を帯びた初日の出の眩い輝きを一身に浴びて、一瞬、作者自身が宇宙の中心に立っているような錯覚にとらわれたのだろうか。

地動説という真理などよりも、多少の矛盾や不都合があっても天動説の全能感の中に身を委ねていたい。そんな作者の願望が「捨てがたき」という上五、そして元日の朝という宇宙にも繋がり得そうな空間の中に滲んでいる。

大陸はもともと一つ冬至風呂 石関六弦

ぶかぶかと柚子の浮かぶ冬至風呂。至ってありふれた冬のひと日の一コマだ。

湯に浸かりながらぼおつと眺めていると、柚子たちは湯おもてのかすかな揺らぎに影響されて、くっついたり遠ざかったりしている。永遠に触れ合うことのないものもあれば、ゴツゴツとぶつかり、或いは寄り添いながら浮かび続けているものもある。

それはさながら、今はなき超大陸が分裂と結合を繰り返して現在の地球の姿を創り出した過程にも見えてくる。

もしかしたらこの冬至の湯船の中に於いて、作中主体は柚子という大陸の命運を握る神のような存在なのかも知れない。わずかな体の動き一つで大陸はいかようにも姿を変える。

極日常的且つ極私的な空間である「風呂」という小さな世界から、一気に大陸の生涯へと思いを馳せる想像の飛躍が楽しい。

そして「大陸はもともと一つ」の措辞には、冬至風呂に浸かるやすらぎの中で感じ得た平和への希求のようなものも込められているのではないだろうか。

現代俳句鑑賞

網野月を

削られて箆筒戻りぬあたたかし

今井 聖

〔俳句四季〕4月号・巻頭句より〕

桐箆筒は経年によって黒みを帯びてくる。その黒ずみを鉋で削ってリメイクした桐箆筒が戻ってきたのである。使い込んだ道具への愛着とリメイクした新装の箆筒の煌びやかさが、座五の季語「あたたかし」にびったりと合致している。心温まる一句である。

梅探る修験の山を仰ぎつつ

岸原清行

〔俳句四季〕4月号・巻頭句より〕

「梅探る」作者は、また「修験の山」を目の前にしているのである。多分この時もまた修行を積んでいるであろう修験者を思いつつ、探梅の自分自身を顧みている。両者の差異と、人としての同義性を探っているように思われる。

妹は寝相の良くて遠蛙

鈴木沙恵子

〔俳句四季〕4月号・踏青より〕

ふと「遠蛙」に気が付いて起きてみると、妹の寝相の良さ
に気が付いた、ということである。寝相の良さに一瞬は微笑
ましくも思え、また疲れているのではないかと気遣い、健康

的なのではないかと思ひ返したりしているのである。春の夜の
一コマを「遠蛙」の季語で担保している。他に「濡れしま
ま結び上ぐる髪春の月」「青き踏む今日のからだに今日の
風」がある。

鳴くたびに鼻われに近づき来

亀井雄子男

〔俳句四季〕4月号・冬銀河より〕

中七座五の「われに近づき来」は視覚的な把握ではなくて
聴覚的な把握の結果ではないかと勝手に想像した。じつと耳
を澄ます「われ」＝作者が夜の闇に同化しているようである
他に「冬銀河だまつて家を出てきたる」がある。

大籠の反古入れ春の炉辺にあり

雨宮きぬよ

〔俳壇〕4月号・むつび月より〕

「春」の景が丹念に描かれている。且つ題の「むつび月」な
らではの景でもあろう。隣句に「春暖炉猛けて虚しくなりに
けり」があるので、呼応し合つてより深く鑑賞することが出
来る。他に「茅茸の茅の厚きもむつび月」がある。

心臓手術生き放題となる四温
手袋の黒悪党のやうに嵌め

丹羽真一

筆塚と彫られ達筆梅白し

〔俳壇〕4月号・生き放題より

作者は四月二十二日に急逝されたのですが、「生き放題」の題にあるこの諧諷は何と言ったらよいのであろうか。作者のお人柄を思う時、恰好良いと筆者は思うのである。只管、合掌するのみである。

春待つといふはすなはちひかり俟つ

〔俳壇〕4月号・惜春より

辰巳奈優美

春は光を意識する季なのである。いや、逆に光を意識して春であることを確かめるのである。そして待春はその光を俟つ季なのである。光の厚みと濃さへの日本人の感受性、すなわち美意識を感じさせる句である。他に「惜春や石くれのごと洗ふ貝」がある。

五浦に飛ばすドローンは花の雲の中

〔俳壇〕4月号・五浦春より

児玉孝子

五浦ではドローンを花の季節に飛ばすという、至極平和な景を詠んでいる。嘗て彼の地は、風船爆弾を放弾した歴史を有していると考える時、「花の雲の中」という現代の平和の在り方をもう一度よく考える機会と捉えたいものである。

鴨潜る水輪を染めて夕茜

〔俳句〕4月号・榛名湖より

山本素行

鴨を見ている内にその水輪が茜色に染まるのを見て、夕茜の時刻になったことを知ったと鑑賞した。「染める夕茜」ではないのである。中七の「・・て」には染められる水輪を認

知した後に「夕茜」を認めたという時間の経過がある。他に「氷片の打ち上げられて白くなる」がある。

主失ひ香ばしくなくなる毛布

〔俳句〕4月号・ルルより

野口理

題の「ルル」は作者の愛犬トイプードルであろうと想像した。上五の「主」もまた愛犬のことであろうと思う。俳句はアルバムでもあり、また書くことでの作者の癒しでもあるのである。他に「白息濃しトイプードル焼く炎濃し」「雪は花ぢやない書きたくないけど書く」がある。

雪折の音が枕にくぐもりぬ

〔俳句界〕4月号・活字より

高勢祥子

夜、就寝中の「雪折の音」であろうと想像する。作者は「雪折の音」で起こされたのであろう。そしてその音が笈のように耳元でリフレインして、なかなか寝付けないのである。座五の「くぐもりぬ」は普通、明確さを欠くという意味に使用されるであろうが、この句の場合は反語的な意味合いになっているように筆者は考える。他に「賑やかな活字の奥の春の夢」がある。

すこし剥いてバナナわたさる瀧の前

〔俳句界〕4月号・さくらんぼより

大類つとむ

瀧を眺めながら一服しているところに、すこしばかり剥いたバナナを手渡されたというのである。句作の技法云々というよりも句の内容に俳（わざおぎ）を感じるのである。他に「どこにありても産声のさくらんぼ」がある。

自選二十句

小林京子

蔵の隅絹糸古りたる手毬かな	新年
賽の目の五で上がりけり絵双六	新年
春の朝ひんやり沈む相撲部屋	春三
聖帝の国見の丘や春霞	春三
ツイインタワー跡地紐育の春	春三
白雲の流るる方へ水草生ふ	春仲
二輪草流れの青き梓川	春晩
万緑や第六感の動きだす	夏三
葉先垂る天道虫の重さかな	夏三

さ	さ	や	か	に	水	脈	ひ	く	蛇	や	月	明	り	夏三
麗	し	き	少	年	の	透	く	青	簾					夏三
籐	椅	子	の	父	の	形	に	包	ま	れ	た	し		夏三
玉	虫	の	な	き	が	ら	動	く	玻	璃	の	棚		夏晩
「	水	明	」	の	創	刊	號	や	鬼	灯	置	く		秋初
秋	晴	れ	の	銀	座	マ	ロ	ニ	エ	通	り	か	な	秋三
青	雲	の	志	あ	り	獺	祭	忌						秋仲
百	年	の	土	間	こ	そ	我	が	家	の	残	る	虫	秋晩
ガ	ウ	デ	ィ	の	教	会	未	だ	秋	深	し			秋晩
咳	一	つ	聞	こ	え	満	場	指	揮	者	待	つ		冬三
黒	髪	に	金	糸	編	み	込	む	聖	夜	か	な		冬仲

スポーティなフットワーク

網野月を

この作家の表現には栄養の行き渡った豊かさを感じる。技法も素材も豊かで、これはこの作家の生来の本質なのであるが、加えて日ごろの勉強の成果でもある。精進のなせる業である。素材や技法が広角であることは反面、未消化な部分も残すことになるが、このタイプの作家には生涯負ってゆくべき課題であって、いや命題と言っても良いだろうが、仕方ないかと考える。テーマが多いということは良いことだと考えている。その分、ある種の器用さを要することになるのである。その点では、この作家のフットワークの良さが十分に機能していると言つて良いだろう。おそらく興味の対象となる事柄や形象が多岐にわたるのであると推察する。関心を寄せるものが多いのである。これは生来の質があるのであるが、後天的に培われた環境が、恵まれたものであったことが示唆されている。

途中の議論は省くとして、結果、作句の中では句の内容と季語がどのような距離感を保てるか、ということが一つの指

標となるだろう。つまり、季語の世界を克服することが出来るのか、いや季語を手足の如く使いこなすことが出来るのかということなのである。

賽の目の五で上がりけり絵双六

掲句は、その点では正攻法な句作りであろう。ただこの句の気転は中七の「：けり」の切れ字である。現代俳句は句意のオリジナリティーが最重要点なのであるが、リズム感の斬新さに加えて、作法における技法の開拓も課題なのである。その点において、秀逸な句である。

聖帝の国見の丘や春霞

万緑や第六感の動きだす

ささやかに水脈ひく蛇や月明り

「水明」の創刊號や鬼灯置く

この四句は、文字通り切れ字「：や」の技法に依って成立している。第一句目と第三句目の季語は句意の設定条件になっている。つまり「聖帝の国見の丘」と「春霞」が、「水脈ひく蛇」と「月明り」が絶妙な取合せになっている。中でも「月明り」の妖しさは作者独特の感性であろう。一般には「青葉風」のような陽性の季語を幹旋するかと思われるのだが。第四句目は「水明」へのご挨拶句の内容であつて、「創刊號」の字配りが粹さを感じる。問題は第二句目なのである。確かに六月六日はオーメンだが、この句の場合は「万緑」に大自然の営みの大きさを誘発されての「第六感」と解釈するのが順

当であろう。

次掲の二句は、切れ字の使用をしないで中七と座五の間に間を置く技法を用いている。

青雲の志あり癩祭忌

ガウデイの教会未だ秋深し

句意は一読、良く分かるものであって、リズム感の切れの良さと相応していると鑑賞できるであろう。

次に掲げる四句は一句仕立て、かつ座五を切れ字「…かな」で止めている句である。

葎の隅絹糸古りたる手毬かな

葉先垂る天道虫の重さかな

秋晴れの銀座マロニエ通りかな

黒髪に金糸編み込む聖夜かな

何れも十五音に加えて句の仕舞に切れ字「かな」を置いている。要はこの作者は、このようなロジックが得意なのである。「かな」は切れ字と言いつつ、柔らかな感性を伴うものであって、むしろ多くの余韻を残す効果が期待されるものである。ギョツと詰めた措辞で表現された句意の十五音に「かな」を付加することで、リズム感はもとより、句意に緊張感と弛緩を盛り込んで、緩急を上手に操っているように思われる。

それが証拠に音数合わせのための「かな」が一つもない。切れ字の「かな」の効果を十分に引き出している。つまり座五の「かな」止めを予め想定しての作法と言って良いだろう。

俳句の王道である切れ字を大いに意識しての作法である。

切れ字は使用していないが、一句仕立ての句は数句見受けられる。

春の朝ひんやり沈む相撲部屋

白雲の流るる方へ水草生ふ

二輪草流れの青き梓川

麗しき少年の透く青簾

籐椅子の父の形に包まれたし

玉虫のなきながら動く玻璃の棚

百年の土間こそ我が家の残る虫

一句仕立ての句と句の中に切れがある句とは、句意の質量が異なるのである。明らかに切れがある句の方が句意の質量が多いのである。その分だけ一句仕立ての句は、凝縮された内容を有さなければならず、詠む対象（テーマ）を見つめる度合いが深くなければならないのである。

ツインタワー跡地紐育の春

咳一つ聞こえ満場指揮者待つ

前掲の二句には極めて新しさを感じる。これこそ作者独自の感性が横溢している句であろうと思う。俳句としては粗削りなところは否めないのだが、今後の進むべきコンパスを暗示しているように思う。

一つ今後の作者に望むとすれば、肥満しないで欲しいということである。その為には常を破ることなのであるが、そのスポーティなフットワークからは、杞憂であるだろう。

自選二十句

菅原真理

話好きな僧に道問ふ春の雪
桃の花堆朱に挿せば紅の濃く
甘やかな風の案内や青き踏む
大繩の掛け声「せーの」風光る
先生に絡み付く児ら新学期
耳元で何か囁く青葉風
松蟬や追憶の日日山にあり
花栗の匂ひ波うつ夕間暮
炭団坂登る下駄音夏近し

先斗町を語るマダムや夏の雨
夜を生きて玻璃戸を叩く火取虫
寝付かれぬ夜は語らむちちる虫
湯の街の輪郭くづす秋時雨
一頭の秋の蝶ゆく草の果て
江戸情緒遺せし秋の金魚坂
木枯の吹き残したる月白し
無彩色の夕べに溶くる寒鴉
円窓はしぐれて色のなき季に
雑煮餅数問ふ声の高らかや
語るごと一目一目と編むセーター

これからも、言葉探しの旅を

丸山マスマミ

菅原真理さんが新珠賞を受賞されてから丸二年。その間、若狭の鳥羽谷に投句されるなど活躍の場を広げて、力を付けて来られた。また総務部員として「水明」を支えておられる。

炭団坂登る下駄音夏近し

櫻蔭句会の皆さんは吟行が好きである。この句は、コロナ禍により外出等を控えていた時期が漸く終った令和六年四月実施の、本郷菊坂界隈への吟行の際詠まれた句である。

本郷界隈、中でも菊坂は明治大正期に樋口一葉、石川啄木、宮沢賢治など多くの文人が暮らした場所である。今は大きく様変わりして、情緒ある街並みもほとんどビルに建て替えられている。辛うじて樋口一葉ゆかりの井戸と細い細い坂道に添って向き合う木造三階建ての家屋は残されている。

炭団坂は急な石段の坂で今も健在。石段を上る今時珍しい下駄の音に作者はやがて訪れる夏の気配を感じ取ったのであろう。清々しい句だ。下駄の主を想像させる楽しさもある。

江戸情緒遺せし秋の金魚坂

この句は何時詠まれた句なのか。この時の吟行の際は「金魚坂」は名を残すのみで、都内一の大きな金魚問屋さんも何処かに移転し、その跡は空地になっていた。しかし、狭い坂道の反対には僅かに当時を思わせる佇まいが感じられた。江戸情緒に触れたくて秋に再び訪れられたのか。

甘やかな風の案内や青き踏む

耳元で何か囁く青葉風
花栗の匂ひ波うつ夕間暮

真理さんらしい繊細な感性が捉えた句。

「青き踏む」は中国の風習から来た言葉とのことであるが、春になると、野辺に出て青々とした草を踏みながら散策などしたくなる。その弾む心を「甘やかな風の案内」とした感性や言葉選びが優れている。初夏になって緑がやや深くなった頃、森や林の中を歩いていると吹く風がなんとも快い。それを「何か囁く」と擬人化しているところに趣がある。栗の花は初夏の頃、黄白色の細長い花穂を垂らし青臭い独特の匂いを漂わせる。それを「匂ひ波うつ」と捉えた表現が秀逸。

大縄の掛け声「せーの」風光る

先生に絡み付く兎ら新学期

この二句は、小学校の先生をしておられた頃の経験から生まれた句か。運動会の呼び物の一つである大縄引き。歯を食いしばり、足を踏ん張って必死に綱を引く子供たち「せーの」という掛け声に校庭が一つになる。空はどこまでも青く吹く

風もきらめいて応援してくれる、新学期が始まり久しぶりの登校。先生にお話したいことが沢山。「先生あのね」「先生聞いて！聞いて！」そんな子供たちを優しく受け止める先生。先生冥利に尽きたことだろう。

夜を生きて玻璃戸を叩く火取虫
寝付かれぬ夜は語らむちろる虫
一頭の秋の蝶ゆく草の果

夏の夜、街灯や窓の明かりに吸い寄せられるように飛んで来る虫。「夜を生きて玻璃戸を叩く」の措辞から火取虫への憐みが伝わる。寝付かれぬ夜もある。そんな時、今まで気付かなかった蟋蟀の音が聞こえ、作者に寄り添ってくれるように感じたのか。秋の蝶は、ひらひらと如何にも楽し気に右に左に舞う春の蝶と違って、草の上や垣根の上などにじつと羽を休めていることが多い。「頭」という措辞により蝶の行く末を案じ思いやる心が伝わる。

木枯の吹き残したる月白し
無彩色の夕べに溶くる寒鴉
円窓はしぐれて色のなき季に

色の表現に敏感で上手な真理さん。この三句は敢えて色のない句を詠まれた。冬の寒々とした月の白さ。それも木枯が吹き残したという。夕闇に溶け込んでゆく寒鴉への愛おしさ、色のない季の静かな深い寂しさ。鮮やかな色だけでなく、「色のない」ことも作者の心を捉えたのであろう。色の蘇りを待つ密かな期待も籠めて。

松蟬や追憶の日日山にあり

真理さんは、越後平野の北部にある新発田市のご出身。高校時代の真理さんは、市の背後に聳える飯豊山地を見て「絶対この山の向うの太平洋側に出て行く」と心していたとか。しかし、今になるとその山々が懐かしくゆかしく思われ、その懐の豊かさに思い至ったのだろう。
最近越後出身の方々で「越後の会」という句会を立ち上げ、励まし合っていらっしやるようだ。

雑煮餅数問ふ声の高らかや 語るごと一目一目と編むセーター

家族の団欒を大切にされる真理さん。家族揃ってお雑煮を祝う賑やかで明るい食卓の様子がありありと伝わって来て微笑ましい。

最後の句は、「セーターは夫の好み海の色」という新珠賞受賞対象句の中の一句を思い出させる。亡きご夫君への深い思いを籠めた句だった。

水明賞のこの句は、時の流れによって齎されたゆとりと包容力が感じられ、一目一目セーターを編みながら、いろんなことを、そして今の幸せを亡きご夫君に語りかけているのかも知れない。

真理さんは俳句作りに熱心で、いろんな所に行きたい、いろんなことを知りたいと探求心も旺盛。そして瑞々しい感性は今も衰えない。これからの水明を背負うホープである。

新珠賞受賞の際にお送りした言葉を敢えてまたお送りします。御一緒に「言葉探しの旅」を楽しみましょう。

自選二十句

岡田宣子

春泥を避けて着地の滑り台
ぬか雨に焼野の匂ひ鎮みゆく
薄氷やはかなき恋のごと消ゆる
一陣の風に微笑む黄水仙
点滅の機影が過る朧月
幕開きてさりげなく取る春帽子
大川の風に揺蕩ふ青柳
珈琲の苦味濃き日や養花天
風紋を消して去りゆく青蜥蜴

夏の月閑かに凜と廃駅舎
乱れなくボレロのリズム雲の峰
曼荼羅の経典ゆかし半夏雨
日捲りの薄さに気付き秋めきぬ
新涼の茶葉の焙煎五軒先
夕されの風にたをやか酔芙蓉
松虫や点つる抹茶の音と協ふ
おしろいや路地の仕立屋灯が点る
乾酪を醸す廃校銀杏散る
棟上げの祝詞高らか小春空
鷹匠の呼気の瞬間鷹飛翔

王道を歩む俳句眼

網野月を

第一印象は背筋の真直ぐな句柄であるということである。

ネガテイヴな言い回しとしては面白みの無いと捉えられるかもしれないが、この作家の場合は決してそうではない。ポジテイヴな言い回しとして、解せるだろう。能や歌舞伎でもまた庶民の娯楽ともなる落語の世界でも〈型〉というのがあった、その〈型〉を大切に学び取るうとしている作家であるという意味に取っていただければよいかと思う。文芸でも然り、芸術の世界ではつまり古典ということに他ならないのである。古典、つまりクラシックというのは古いものという意味ではなくて、模範的などという意味で理解して欲しいのである。このようなクラシックな美の一つに、形式美があるだろう。この作家については様式美と言っても良いかも知れない。途中の議論は省くとして、俳句表現においては、様式美を体現するためには、素材に対してのいわゆる俳句眼を有していなければならず、その俳句眼に依って、詠む対象となる素材を切

り取るところから始まるのである。その切り取り方そのものの中に既に最後に完成する俳句の良し悪しが暗示されているということなのである。

次に自選二十句から、鑑賞をしてみよう。

薄氷やはかなき恋のごと消ゆる

松虫や点つる抹茶の音と協ふ

おしろいや路地の仕立屋灯が点る

珈琲の苦味濃き日や養花天

以上の四句は何れも、「：や」の切れ字を使用している。前掲の三句は上五に切れ字「：や」を使用して先ずは季語を提示し、中七と座五の内容と補完関係的な繋がりを持たせた上で、句全体の意味内容の主語になっていたり、またイコールで結び付けられたりしている。俳句の世界で磨き上げられ続けてきた巧妙な切れ字「：や」の使用法である。「薄氷」と「松虫」の両句は句の主語としての役割を演じてる。座五の動詞、つまり述語を配しているのので至極理解しやすい。つまり切れ字「：や」でリズム的には切っているものの、意味としては密着しているということである。第三句目は「おしろい」が景の条件を提示しているとも解釈できるし、中五の「灯が点る」様子を形容しているとも解釈できるだろう。より複層的な形容を試みた意欲的な句ということが出来る。それらに対して、四句目「珈琲」の句は中七に使用した切れ字「：や」に依って上五中七と座五に提示した季語との転換をしている。特にこの切れ字「：や」の使用の方法は、作者が思索

を重ねる上で自然に出てきた使用方法なのではないか、と筆者は考えている。俳句のリズム感というものは、構えて出来るものではないのである。將に身に付いたものとして發揮されたものであるということだ。この句は長く作者の代表句となるであろう。

次にあげる七句はいわゆる一句仕立てのリズムで表現されている。

一陣の風に微笑む黄水仙

点滅の機影が過る朧月

大川の風に揺蕩ぶ青柳

風紋を消して去りゆく青蜥蜴

春泥を避けて着地の滑り台

ぬか雨に焼野の匂ひ鎮みゆく

幕開きてさりげなく取る春帽子

前掲の六句は、動詞が一つ使用されている。中でも先の四句はその動詞がすべて季語に繋がっている。動詞を使用するとしても句柄が派手になるし、作者の見立てが前面に出て個人的な感慨が深まるのであるが、四句とも抑制の効いた内容になっている。「春泥」の動詞は作中の主人公の行動を表して、「ぬか雨」では座五の「鎮みゆく」が「焼野の匂ひ」の述語となっている。作者の作品の中では珍しいかも知れないが、今後はこの方向性の作句にも取り組んで欲しいと考えている。そして「幕開きて」の句であるが、この句は二つの動詞の主語が転換をするという難しい技法にチャレンジして

いる句であろう。一句の中で動詞が複数存在して、且つその動詞の主語が異なる場合は空中分解したような句になることが多いのであるが、掲句は、その難しさを克服していると言つて良いかと考える。ただそのことよりも「さりげなく」という作者の思いを込めた措辞を入れて句の中に作者の存在を明らかにしている。これらも作者の作品にはあまり見られない作法であろうと考えるが、この作法にもこれから大いにチャレンジして欲しいと考える。

次掲句七句は、中七後に切れを作り出して、座五を季語でおさめている。

乱れなくボレロのリズム雲の峰

曼荼羅の經典ゆかし半夏雨

日捲りの薄さに気付き秋めきぬ

夕されの風にたをやか酔芙蓉

乾酪を醸す廃校銀杏散る

棟上げの祝詞高らか小春空

鷹匠の呼気の瞬間鷹飛翔

文字通りオーソドックスな配合の句作りである。中でも「乱れなく」の一句は座五の季語「雲の峰」の本意・本情との取り合わせから成功をおさめていると言つて良いであろう。

〈型〉をベースにした俳句眼をこれからも磨き続けられることと思う。王道の俳句眼を育てる一番の糧は時間である。これから如何に広く深く濃い俳句的時間を過ごされるか、大いに期待するところである。

俳誌望見 梅澤輝翠

「楽園」

二〇二四～二〇二五 第四卷湊合版 三一四ページ
主宰 堀田季何 発行所 東京都練馬区

俳句、連句を中心とした詩歌結社。俳諧自由の理念に基づき、俳諧普及のため、堀田季何によって二〇二〇年三月に設立した。

主宰句 第四卷 第一号 「輪切」 十三句より

水鉄砲もて父殺し幾度となく

第四卷 第二号 「刃先」 十三句より

平等を喜ぶ生者割石榴

第四卷 第三号 「切つ掛け」 十三句より

母なげに鳥の句や日向ほこ

第四卷 第四号 「玉雪」 十三句より

どの口も阿茶羅漬噛み阿修羅われ

第四卷 第五号 「伝」 十三句より

火星からあなたの電波アスパラガス

第四卷 第六号 「偏愛」 十三句より

こんりんざい子どもつくらず水みづ

各号如 個個集 果実鈔／個個集／果実快食

球体集 天・地・人／秀逸／佳作

第六号より 個個集 果実鈔

多数決で春と決めるのも違う 土井 探花

ふきのとう放射能をえがく画家 赤野 四羽

鳥交る首吊りの木のてつぺんに 山崎 垂

球体集

①天 眉引マヨリきの国境線のドライブスルー 野武由佳璃

②地 五臓六腑へ虚無への供物捧げたる 小田 狂声

③人 雪催故国は安くなりにつけり 秋山 葉切

楽園俳遊記

猫の目連句会、やって□。

毎月第一日曜日午後一時より、文京区民センターなどで開かれていた連句の会です。(状況によりオンラインで開催)

半歌仙「茶席入り」の巻

濃紺の軽羅きりりと茶席入り 静寿 美子

てんとう虫のついてゐる背ナ 日比谷虚俊

パレードのトランペットの高らかに 江口 足人

と連句十八句続く。

☆「楽園」は二〇二五年、第十一回全国俳誌協会編集賞特別賞受賞の栄に浴しました。誠にありがとうございます。

山本鬼之介 選

水明集

墨堤に静けさ戻る鳥曇
酔ひ痴るる昭和歌謡や春の宵
春夕焼金波の隅田船行けり
空オケにジント流るる春の宵
春風に乗りにて流るる応援歌

利根 倉田星歩

十三湖風に揺らるる蜩舟
足踏みオルガンの音や雛祭り
荒れ家静もり梅の天蓋ありにけり
名画座の入り口探し柳の芽
春障子影絵遊びの舞台うら

さいたま 寺町知子

春時雨松げざやかな御成門
ものの芽を踏んでライフル構へけり
啓蟄の空へドローン飛び立てり
赤子抱き産院を発つ春コート
寄席跳ねて連れと角打ち臙月

さいたま 皆川更穂

白き羽空に打ちつけ鶴帰る
白鳥帰る湖面平らに戻りけり
春の日や巫女の神事の艶姿
佐保姫の裳裾を振ればそよ風に
殿は空に溶け込む花の雲

反町 修

八重桜つづく坂道二の丸へ
鯢鉾の尾鰭たかだか春の雲
幾たびの門出見送る軒燕
信号の向かうから来る花吹雪
履歴書へ長所今更ならべ春

石関六弦

多喜二忌や係留の船大揺れに
春の雨首をすくむる麒麟の子
春暁の出船に妻の握り飯
花祭象の前足ひざまづく
別れ霜あと幾年の薄化粧

綿引まりこ

朧夜の廊下に残るかをりかな
磯巾着潮に任せて色仕掛け
黒髪も老いに備へよ鷹女の忌
囀の細く悲しき日暮かな
首塚をきつと取り巻く春田かな

さいたま 秋谷風舎

ふるさとを想へば訛る啄木忌
椅子の背にリュックを吊るす新社員
梨の花いつの間にやら本降りに
ゆつくりとネルのドリツブ宵の春
蝌蚪散りぬ曲はシヨパンのプレリユード

さいたま 森下山菜

夫死後の押印ばかり花の冷
欲しきもの夫の相づち春炬燵
死と生の小鉢かち合ふ初彼岸
野晒しの思惟仏囲むたんぽぽ黄
花仰ぎ途方に暮るる夕べかな

本橋稀香

春の庭手折りし木木の花彩ふ
ものの芽の見え隠れして川光る
ものの芽や去年を脱ぎ捨て仰ぐ空
薄紙の仕切る宴や春障子
建前におかめお多福春の風

越谷 阿部幸代

行く雲を映す棚田や蝌蚪の水
蛙子や水紋かすかなる棚田
波風の香りたのしむ朧かな
春の宵疼きつつある親不知
平穩無事に一日過ぎゆく春の宵

平塚 丸屋詠子

菜種梅雨音楽室の音合はせ
幾つものピアスのある子卒業す
春雨や花片で描くハートの絵
清明や暁の中走る人
春暁やポテトバッグの緑の芽

さいたま 元田亮一

鯉がはね三味の音漏るる春障子
閑取のざんばら髪や春稽古
春障子木木の影絵がゆれてをり
笛吹けど踊らぬ世界木瓜の花
燕来て軒に傘吊る中華店

さいたま 飯田忠男

CT画像挟み無言に春の雨
老木に薬あまた星川沿ひ
閉店の「お知らせ」とど春の雨
旅立ちの校庭包む木芽雨
乗降のボタンは指で春電車

田中弘子

猫と独りの家内安全のどかなり
流水のゆりかごゆるる子アザラシ
カンバスに浅葱下塗り草萌ゆる
春霞目覚めの果ての夢おぼろ
流水に挑むスクラム船一丸

吉川 杉浦千祐

春光や歩き初めたる児の髪に
春陰や白白として売家札
飴色の色紙を飾る暮春かな
祖母の手に似てきし母よ紅椿
しやぼん玉風のまにまに遠く遠く

大阪 遠藤人美

牡丹の芽期待と不安の新天地
春愁や簪ばかり輝きぬ
土筆摘む探しあてたる群生地
火付役は男のロマン野焼かな
野焼跡散髪したる吾子の如

さいたま 川島夕峰

歌ふごと杜の都の春の水
広瀬川欄干に寄り水の春
遠き日も定禅寺みち糸桜
深山の姫の墓石に初桜
城山に彼岸桜のおちよほ口

東京 山中いちい

春炬燵ハートのクイーン失せしまま
休漁の船に猫どち春の海
悩ましき旅券の期限初つばめ
春の海島のフェリーの紙テープ
かけ慣れぬ市外局番新社員

上尾 室井早都子

耕しや八十路の鋏に土固し
青春の海鳴り聞こゆ桜貝
何処行くも二人は一緒五月来る
老妻の粧ひ出でし聖五月
スパイクに開幕戦の春の土

若狭 山崎郁子

果報待つ磯巾着の痩せ我慢
波に耐へ風を待ちたる磯巾着
常世より蔵に巢作りつばくらめ
八重桜造幣局のしんがりに
遅咲きの淑やかなるや八重桜

さいたま 平野 楽

踏み込めば身が陽炎に溶けるかも
一人旅陽炎遊ぶ一本道
雪解や誤解の解けし友の文
陽炎やあなたの記憶薄れゆく
陽炎が眠気を誘ふ昼さがり

さいたま 北出久美子

朝日さんさん昭和を告ぐる雛飾
蔓伸ばす草の芽眺め感無量
春暁待ちて心弾ませ出掛けたり
コンクリの隙間に匂ふ名草の芽
春の洋上露天風呂より沈む陽を

さいたま 小川洋子

木瓜咲きて花に声あり想ひあり
饒舌も寡黙も仲間花粉症
古民家の梁に見映えの吊し雛
名刹のありのままなる糸桜
老梅の余生を尽し咲き誇る

さいたま 香田裕誌

修業の式典予行水温む

阿部貞代

若狭 松村笑風

行商の籠より覗く蕨かな

灰汁抜き蕨のパック道の駅

富士塚のお山の上に春の風

停戦の朝刊の文字四月馬鹿

春の日や封鎖されたる海
風の田の泥の煙や蝌蚪の群れ
若松や親子喧嘩の逆転劇
春の土四方へ延ぶる土竜道
桜吹雪河川工事の飯場めし

朱き橋渡れば異界朧月

三浦真由美

宿場路やゆるりと巡る春一日
色変へぬ松の緑や義民館

森下風湖

思ひ出のこぼれ落つるや朧月

我もまた毒を持ちをり磯巾着

跳ぬるやに日差しの中を春の服

猫の恋文箱の底の古手紙

遠足の列離れたりくつついたり
胃袋に季節丸ごと豆ごはん
夏近し肩までの髪束ねたり

石刻の「平成ひろば」春日濃し

春の日の駅から笑まふ親子かな

列並ぶやうに春日や喫茶店

春の日や兎の黒髪濡れるほど

春の日へ結婚式の帰りかな

吉川拓真

さいたま 播磨 進

椿負ふ直実公の勇姿かな
用水路舞ふが如きの花筏
麗らかやホコ天嬉し肩車
山路下る里の外れの糸桜
春光や姨捨駅の展望台

誰に見せん思案投げ首春の服
朝まずめ背を割つて今蝶生る
黒胡椒たつぷりカルボナーラは春の味
花前線今日到着と礼文から
朝寝せり雨垂の音を守歌に

さいたま 駒谷行雄

隴月チャペルの鐘の流れくる
モナリザの謎の微笑や隴月
磯巾着湯舟に四肢の軽きかな
文机の母の文箱に春の塵
菜の花や揺れにまどろむ小湊線

さいたま 石井直子

沢庵も菌茎で噛めばおらが春
菜の花の果ての果てまで江戸川堤
春深し咲く花よりも散る花を
ひゆうひゆうと引き摺る息や春の風邪
赤子抱く四股踏む数ほど春巡業

三郷 戒能邦人

夕闇や今は静かに梅見茶屋
雪の果北鎌倉に街の黙
もて余す老いの繰りごと涅槃雪
鳥帰るぼつりぼつりと街路灯
手作りの雛人形の背筋かな

川口 新井のり子

獣じゅうの食む菜の株すつくと茎立ちぬ
アネモネの赤きパワーを貰ふ朝
囀なげにテンション上がる野良の道
短調の織りなす調べ春眠し
過疎の地に幟高高春祭

若狭 西川夕月

忘れ霜あの人今日は誕生日
大空に行路のありや鳥帰る
彼岸かな作務衣の尼僧黒ズック
鳥帰る一斉下校の子のやうに
春泥や次の一步の置きどころ

木村小麦

夏帽子一番似合ふ末娘
夏さぎす弓を引く娘の遠まなざし
夏めく日荷物に母の文二行
牡丹や言ひたきことの二つ三つ
夏浅しカーテン揺れて訃報聞く

佐野友夏

春の日に介護者の声ふんはりと
記念日の遠くなりけり梅見茶屋
振り返る猫の耳先忘れ雪
鳥帰る日輪星座磁場頼り
友作るジャムをひととせ掬ふ春

加藤みち

朝靄を割りてミモザの黄の眩し
狭庭いま白木蓮の統ぶる国
春雷や交信迫る宇宙人
閑あげて花の満ちたる午後三時
くちほその付き従ひて花筏

さいたま 鈴木藻好

修験者の脚半にはぬる春の泥
春泥を飛び越す白きスニーカー
卓上に揺るる潮の香若布しやぶ
洋館の並ぶ坂道花水木
寄り添うて釣糸垂るる春の海

さいたま 石黒由美子

待つ事は生きる術なり磯巾着
「約束」といふ名の店や朧月
ICUの父の意識や朧月
中年の一日短し春惜しむ
花の雲見物客を懐へ

木谷葉子

春陰や落ちぬしものは天使の輪
秘め事は桜の下に明かしけり
満開の桜に溶くる妻の名や
花冷に今年も拭ふ涙かな
散る桜静寂遺して消えにけり

金沢 小島つぶ金

お揃ひのひと針づつの藍浴衣
習練とマラソン人は朱夏向ふ
全力でペダルを踏みて弾く汗
風鈴の透きとほる音を外すかな
棘やさしセロハンの中白き薔薇

所沢 関根千恵

うぐひすの遠鳴き竹林に風
春夕焼足裏揃へて修行僧
奥入瀬の水やはらぎてかとの紐
句作りの季語を探せば亀の鳴く
春光に西の松原色の濃く

さいたま 山下ユリ子

釣りたての鱭目ン玉海の色
余所行きの顔して並ぶ入学式
近頃はをともネイル木瓜の花
静ひし空気を飛ばす花吹雪
雀の子一尺飛んで一休み

和歌山 嶋田洋子

陽炎に笛吹童子やつて来る
ちんどん屋躍る陽炎勢ひ付く
雪解道誰か居さうな柚の家
雪解の激流に入る山の鳥
雪解道おとこの背中心地良く

北山建治郎

春疾風母に続きて父病

木瓜の花母の近頃何者か

名残り雪孫の手の平真つ赤か

鳥帰る川面静かに輝きて

鳥帰る小二の孫が習ふ字よ

躑口いにしへ見えし熊谷椿

清清し馬酔木に引かれ石だたみ

夕暮の源氏車の花の赤

愛犬のかほそき声や朧月

この年の開花待ちつつ愛犬逝く

仰ぎたるま青な空に花水木

花水木小犬と歩く好きな街

早春やほんのり酔の香夕厨

流れゆく雲より白き辛夷かな

春風や胸のリボンを揺らしつつ

朝夕に新しき日の桜かな

ひっそりと桜満ちたる谷向かう

白鳥帰る立山の空に長き首

あきらめて春泥を踏む茶屋の前

路地抜けてまた路地に入る花曇

川口 澤田たみい

公園の園児らの声春の風
青空に桜一輪開きけり

椿落ちて一輪の花咲く草の上

桜咲く河と語らふ散歩道

道を行く明るき色の春セーター

さいたま 関 久美子

ビル谷間川向かうへと桜かな
散歩道夫の背中に花ひとつ

普段着のままの出会いや花すみれ

花見舟料理談議やうしろ席

行く春や靴音響く石畳

大神満智子

ものの芽の小さき先つば天に向け
春野ゆく予定なき日の散歩かな

蜜色の陽光淡し春の野辺

ふと涙花粉症のせいにして

可愛くも棘あるあなた木瓜の花

横浜 石井妙子

八十路の吾今年も棚にこけし雛
旋回の群れなす雲雀空青し

歩く程春の日射しの心地良し

ひよろひよると花菜の黄色風に揺れ

小波の川面に黄色花菜風

東京 大島千恵

さいたま 伊藤美津子

小山あつ子

武田重子

初蝶や幼の前にまた後に

東京 清水美千子

初蝶にまたも空振り猫パンチ

とりどりの木の芽花の芽時は今

空缶に忘れられたる蝌蚪二匹

足の生えたるおたまじやくしは何音符

大阪 海老名ノルン

黒髪をばざりと切りて入社式
しやほん玉幼児の頬の赤くなり

桜漬白湯の中とて美しく

春光や遺影の夫の輝けり

春光や痛めし膝も癒えるよな

春の田に逆さ富士あり塩にぎり

菜の花やトコトコ走るムーミン列車

うららかや窓全開の光浴び

のどかさや月に一度の休刊日

児に譲る降車ボタンや春うらら

さいたま 樋口元美

朧月ひと日の業の褒美なり

朧月何も持たずに生まれたり

もういいかいまあだだよと朧月

あなたどこ見てんのかよと朧月

さいたま 門真宏治

東風の中菅公の詩を思ひ出す

強東風や合格絵馬はかつかつと

春雷の去り行くまでの珈琲館

花柄のスカートふうらら駅に立つ

菜の花の辛子和へ盛る萩小鉢

菅原靖子

戦争のなき海磯巾着ゆらり

磯巾着クマノミ抱へ陣を張る

ほろ酔ひの背に朧月仄かなり

廃線路朧月夜の旅路かな

日当りの良き家に紅き木瓜の花

西窪弘子

城攻めの春田の堤忍の空

さきたまの古墳ぐるりと春田なり

バスに揺られて野鳥観察春の山

春風にふらりとカフェに昼下り

父母の先まつすぐ歩む入学児

稲野幸子

横断歩道吾子のまじ顔桜まじ

逆上りできたできたよ桃の花

高台の里は朗らか桃の花

饅頭を選ぶジャンケン桃の花

露味噲やおかはり御飯売切れて

緒方みき子

嫁して幸せと言ふ名の春が来た
貨車すべて油槽車山夕焼
近づけば蘭鏝二匹向きを変へ
珈琲のひと匙そつと夏の宵
一匹二匹あといっぱい恋螢

さいたま 森田克己

光浴び友の破顔の春シヨール
水の音や春田の土の黒き艶
のどけしや同じところでまた笑ひ
立読みの古書に書き込み啄木忌
ラトビアのコーラスに酔ふ春満月

さいたま 羽島秀子

名は無くも陽だまり抱く春の猫
蕾の矢一斉射撃紫木蓮

大阪 飯塚智恵子

のどけしや里の仁王の大欠伸
千枚の春田に千の神御座す

横山礼子

平和だな洗濯物にしやぼん玉
行く春や切株白き過去の道
チューリップ令和の色のおくらめる

永き日や猫の駅長毛繕ひ
春の野の草の波間に黄の帽子

さいたま 今西 操

花冷えやチェロの奏づる低き音
新聞は三日前のか春炬燵

小野町子

山桜朝日に緑含みをり
くまのみとのらりくらりや磯巾着
磯だまり磯巾着の舞台かな
朧月まとひゆつたり散歩路
朧月心もとなき日のありて

春炬燵色とりどりの刺繍糸
紀伊國屋書店待ち人ありて春の宵
櫻散る高麗門を潜りけり

枝折れし桜拾ひて朝の道

三森恵子

花影に画板を立てて城下町
観音の横顔くつきり夕桜

所沢 飯室夏江

風の音土の香時はすでに春
ガラス戸に陽射し満つるや春の朝
背丈より高きへ野火の炎かな
白子干青菜と和へる朝日入る

青い目の人形にこり桃の花
アルプスの裾野一面桃の花
霞ゆく新府城跡寥々と

母と子の夕陽の川辺野蒜摘む
姉いもと母の手縫ひの春の服
春服の熟年憩ふ雨のカフェ
図書館跡地今は公園花の雨
一日絵を花満開の小川辺に

宮代 関谷多美子

見渡せば春田の風に舞ふわたし
古古古米も旨し感謝や長閑なり
いつの間に墮落のこころ春炬燵
うらうらと櫻樹並木に大欠伸
欄干に招き椿の直実公

さいたま 糸井しるく

桜咲く試歩なる夫の無事もどる
白内障才べ後に見ゆる桜かな
新緑や山に緑の風の涌く
九八嬬のこせし庭に花満ちて
春休み隙間みつけて子訪れり

鬼石 榊原聰子

花の宴米寿を祝ふ四世代
花の宴ジュースで乾杯三歳児
お別れの涙ではなく花粉症
花粉症ゴーグルつけてパー上がり
友訃報信じきれず春の暮

田口文子

寄居虫がテント担いで気まま旅
世話物の「水熊亭」や臥竜梅
孫娘を桜かくしが送り出す
やつと来し椿の香り庭に満つ
夕ざくら夢のまた夢俺の芸

東京 桐山遊童

咲き揃ひなほ溢れたる八重桜
下の名で呼び合ひはじめ八重桜
灰色の空切り裂きて初燕
満たされて何もせぬまま春の午後
客去りて八重桜意気揚揚と

森田恵美子

滴を持し挑みしフィギュア桜咲く
有終の美飾り「花織」八重桜
八重桜鞆鞆揺らし空に舞ふ
老老の車椅子の脇八重桜
停戦を春の光に願ひけり

さいたま 榎本道代

土手を行く花見がてらの美容院
花冷えや堀のむかうへ鳩が飛ぶ
河鵜が一羽水面たたいて飛び立てり
ふんはりと春色まとひ外出す

藤沢 小島喜代子

花蘇芳「ペニー・レイン」の赤い服

卵持つ手に給上がらぬ啄木忌

戒名や風に殴られ草の息

お米研ぐやわき水の山笑ふ
星仰ぎしだれ桜と柳の夫婦

草 加持 永喜 夫

東 京 中村まどか

☆

☆

俳句

7月号
予告

6月25日発売

巻頭作品50句 二三村純也
作品21句 横澤放川・井上弘美

予価1,300円(本体1,182円)⑩

大 特 集

おしやれな句

- 総論 俳句と装い
- 衣料品の句——春・夏／秋・冬
- 衣料雑貨の句——春・夏／秋・冬
- 靴・帽子・鞆 ●季語ではない服飾品の句
- 番外編 おしやれな人を描いた句

第60回 蛇笏賞 受賞第一作21句……大木あまり

角川俳句賞作家の四季 15句……千野千佳

追悼 岩淵喜代子

新連載

幾星霜の扉

近代俳人の肖像

……岩井英雅

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

作品鑑賞

山本鬼之介

物など、いろいろの形を映し出しているのであるが、何せ素人がやることなので打合せ通りにはゆかず、悪戦苦闘している様子が「舞台うら」で確りと表されている。

寄席跳ねて連れと角打ち臙月 皆川更穂

酔ひ痴るる昭和歌謡や春の宵 倉田星歩

出生から少年期と青年期、そして、働き盛りを昭和時代に過ごした者にとって、昭和歌謡は常に身近に存在するものである。男女それぞれ名を馳せた歌手が歌った演歌やグループサウンズの元氣溢れた歌の数々が、今なお脳裏に焼き付いている。彼の高橋圭三・アナウンサーが、回を重ねて白組の司会を務めたNHKの紅白歌合戦に、毎年新曲を引つ提げて晴れやかに登場した歌手の顔や歌の数々が懐かしい思い出になっている。

本句の作者もそういう時代に身を置いたのであるうし、であるから、この俳句から作者の心情が溢れ出てくる。春の一夜、往時の懐メロを聴きながら独酌を愉しんでいる作者の姿が、「酔ひ痴るる」の措辞に活写されている。

春障子影絵遊びの舞台うら 寺町知子

家族団欒の様子を詠んだ俳句である。春の夜、両親が子供達を喜ばせようと障子に影絵を映し出している。人や鳥や動

作者の居住地に近い寄席と言うと、上野の鈴木演芸場・新宿の末廣亭・浅草の演芸ホールが該当するが、「角打ち」とセツトすると、どれも該当するように思える。近年街で古き佳き時代の角打ちの店を再現したような立飲みのお店を見掛けることがあるが、どうもしっくりしない。

酒屋に隣接した狭い場所でも客同士が肩を寄せ合い、塩豆や柿ピー・裂き烏賊などの乾き物をつまみにして、升に注がれた安酒をちびりちびり飲んでいた昭和時代の角打ちの雰囲気は遠くへ去ってしまった。

現代の立飲みのお店に昔の角打ちの店を重ねて詠んだ俳句かと思うが、時代を通じて不変の臙月を据えたことで読み手の心を掴んでいる。

春の日や巫女の神事の艶姿 反町 修

巫女の神事は、神社で神主や他の神職を補佐する仕事の総称であるが、その中で代表的な仕事は巫女舞であり、掲句は明らかにその様子を示したものと受け取れる。

大分以前のことになるが、筆者がサイクリングツアーの途次、日光市から山路伝いに鹿沼市に入り、由緒ある古峯神社に一泊したことがある。翌日早朝に巫女舞が披露され、その厳肅にして実に艶やかな舞姿に目を奪われ、甚く感動した想い出がある。巫女が握って振る神楽鈴の妙なる音と、華麗な反り身の巫女の姿が今でも脳裏に残っている。さて、この句の巫女は何処の神社の人なのだろう。

信号の向かうから来る花吹雪

石関六弦

信号待ちしていると、進もうとしている方角から風に乗って花吹雪が舞ってきた。ただそれだけの内容の俳句であるが、行く手に満開を過ぎた桜の並木があり、有終の美を飾るべく道を行く人々にアピールしているかのようである。さて、信号を渡った作者のそれからの行動に興味が湧く。

春暁の出船に妻の握り飯

綿引まりこ

この船は近海で漁をする漁船であろう。夜の明けきらぬ内から弁当の支度をしている漁師の妻である。身体を張った作業をする漁師の夫のために、懸命に愛妻弁当を作っている。両手で確り握った大きな握り飯を、無事大漁の帰還を願いつつ夫に手渡ししている。東の空が白んできて、港を離れた船が次第に小さくなって沖に消えるまで手を振っている妻の姿がいじらしい。

首塚をきつと取り巻く春田かな

秋谷風舎

首塚とは、合戦や処刑によって討ち取られた武将や罪人の首を埋葬して供養するために建てられた塚のことであるが、東京のど真ん中にある平将門の将門塚を筆頭に、全国に結構多くの首塚があるようだ。

さて、本句の首塚が何処に在るものかは不明だが、検索の結果によれば、大化の改新の蘇我入鹿の首塚と関ヶ原の合戦の大谷善継の首塚が、有名人の首塚としてこの条件に合致し、その他全国各地に首塚なるものが存在するので、全く無名なものなのかも知れない。長閑な春田が首塚を厳しげに取り巻いているという表現が面白い。

欲しきもの夫の相づち春炬燵

本橋稀香

心打たれる俳句である。日常的にごく自然に為されていた夫との会話があの日を境に永遠に途絶えてしまったのだという作者の実感が、春炬燵を媒体にして見事に表現されている。多くの想い出を作ってくれたこの炬燵を、これからも大事に使ってゆかれることであろう。

波風の香りたのしむ朧かな

丸屋詠子

作者のマンションから湘南の海までは三〇〇ほどの距離で、波の音は聞こえないが、その日の気象条件によっては潮

の香を感じるということ。永年海無し県に居住する我が身にとつては、多少羨ましく思うこともあるが、双方それぞれ一長一短があつて良いのであろう。

朧夜に、少し開けてあつた窓から海風に運ばれた潮の香が入ってきた。居ながらにして朧月にぼんやりと照らされた海岸を散歩しているような気分になつたのだらう。

燕来て軒に傘吊る中華店 飯田忠男

句会に出句された掲句の句意が判らず、作者に訊ねたところ、地元にも古くから在る中華料理店の入り口の軒に燕が営巢してしまい、来店客に糞害が発生するのを防ぐために軒に広げた傘を吊つて防いでいる、との説明があつた。確かめた訳ではないが、なかなか珍しい光景だと思ふし、口コミで客が増えるのではと思つた。

椅子の背にリュックを吊るす新社員 森下山菜

たまたま朝夕のラッシュ時に電車に乗ると、勤めの人の殆どがリュックを身体の前に掛けて乗っている。自分がサラリーマンの時代は、今のような格好良いリュックは無く、殆どの人が革の鞆を持って通勤していた。現代は、新社員も当然のことリュック姿で通勤するだらうから、職場の椅子にリュックを吊るして何ら不自然さは無い。しかし、昔の世相を知っている者にとっては奇異な光景に思えるのではなからうか。

その辺の微妙な心理状態を表したこの作品を読んで、時代の流れをつくづくと感じた。

薄紙の仕切る宴や春障子 阿部幸代

料理店での宴会であらう。壁や襖で仕切られた部屋でなくても、障子があるだけで感じが違つてくる。隣同士が筒抜けでは落ち着かず、折角の宴が盛り上がらない。薄い障子紙が大きな効果をもたらしている。

清明や暁の中走る人 元田亮一

二十四節氣の一つで、陽暦では四月五日頃になつていくから、寒からず暑からずで運動するには持つて来いの時季であらう。空が少し明るくなつた頃、元氣よくジョギングしている人々である。作者もその一人で、同じ道を行き交う人や、自分を抜いて走り去つて行く人、また、自分が抜いてゆく人など、様々な人間模様が展開される。

閉店の「お知らせ」しとど春の雨 田中弘子

どのような業種の店かは判らぬが、作者が利用していた店なのであらう。その店を訪れると、入口の戸がしまつていて、都合により店を閉じる旨の張り紙があつた。折からの雨がその張り紙を濡らし、実に淋し気である。冷たい冬の雨でないのがせめてもの慰めである。

カンバスに浅葱下塗り草萌ゆる 杉浦千祐

春野の風景を写生する油絵であろうか。先ずカンバスに萌葱色を薄く下塗りして全体の調子を整える。そこから一筆一筆手を加えながら萌え始めた春の野を描いてゆく。脇で見てみると、自分が春野の中の一点になっているような気がしてくる。

土筆摘む探しあてたる群生地 川島夕峰

薇・松茸・穂の芽など、稀少な山や野の植物の群生地を見付けたら誰にも教えず、自分一人で秘しておこうというのが人情であろう。それほどの価値は無いのではと思う土筆でも、その群生地を探し当てた時の気持は格別なものだと思ふ。

土筆を使った料理には、代表格の佃煮をはじめ、卵とじや天ぷら他いろいろあるようで、この俳句の内容が理解できた。

かけ慣れぬ市外局番新社員 室井早都子

読み手が本句の句意をつぶさに理解するのは難しいかと思ふが、筆者は、勤務していた会社のOB会で年配の女子社員から聞いた愚痴話を思い出して納得した。その愚痴話というのは、「今の新社員はお客とまともな電話の会話が出来ないので困ってしまう。家に固定電話が無いし、スマホはメールばかりで電話での会話をしないから電話恐怖症になっ

てる」という内容で、かかってきた電話を取るのも電話をかけるのも怖々やっていると信じられない話であった。それに比べると、この俳句の新社員はまだ増しな方なのだろう。

八重桜造幣局のしんがり 平野 楽

毎年四月中旬、造幣局さいたま支局で開催される「さくらのさんぽ道」を詠んだ俳句であろう。二〇種以上の名のある八重桜の中を通り抜けるのであるから、さぞかし華やかな雰囲気味わえるのだろう。筆者はまだ此処へは行ってないが、大分以前に、大阪の造幣局本局の「桜の通り抜け」を体験しているので、その様子が伝わってくる。

しゃぼん玉風のまにまに遠く遠く 遠藤人美

子供の石鹼玉遊びに便乗した作者か。折からのそよ風に乗って、生まれ出たしゃぼん玉が次々に飛んでゆく。「遠く遠く」は、横方向と縦方向を示していると思う。横へ流されたしゃぼん玉が空へ昇って視界から消えてゆく。

歌ふごと杜の都の春の水 山中いちい

「杜の都」は宮城県仙台市の雅称ということなので、出句された五句は、仙台を舞台に詠まれたものと思われる。

この句の「春の水」を、仙台市内を流れる清流の広瀬川、そして、「歌ふごと」の歌を、さとう宗幸の『青葉城恋唄』と解すれば、俳句の立体感がますます高まるのである。

水琴窟

(水明集五月号鑑賞)

池田雅夫

古き良き時代語りて春炬燵

森下風湖

その昔、家族の団らんの場であった炬燵。横になつていついつい居眠りをしてしまう。昭和の時代の小さな炬燵から掘炬燵に、そして電気炬燵になり安全に暖をとることができた。春になつて使用される機会が少なくなった「春炬燵」。「古き良き時代」の象徴として当時を懐しんでいる。

立春や子の靴先に日の匂ひ

佐野友夏

寒が明けて「立春」となる。寒さを堪え抜いたあとの春にそこはかたなく安堵の感が表われている。そうした期待感が「子の靴先に日の匂ひ」に込められている。明るさとともに暖かさも感じられる広場を駆け回る子等。その靴先の擦れや汚れを含め「日の匂ひ」として強調しているのだ。

凍雲や伝ふる指示の宙に消え

前田夏野

冬空に凍てついたように動かぬ「凍雲」。サッカーやラグビーなどの屋外競技であろうか。選手の激しい動きを追って適格な「指示」を出すのだが凍雲の彼方へ消えて指示が届かない。その苛立ちを凍雲のせいにして笑いとばしている。

初春や伽藍ふるはず大太鼓

大神満智子

寺の建物、寺院を「伽藍」という。新年を祝い「大太鼓」の重々しい響きに浄められた本堂で「初諷経」に及んでいるのである。「初春」の語によって、陰暦の風習にならった言葉のひびきがめでたい雰囲気醸している。僧籍でなくても、参詣する一般の人々にもそのめでたさが伝わっている。

春めきて半音高く四十雀

駒谷行雄

住宅地でも雀と同様に身近で見かける「四十雀」。朝から「ツピツピツピ…」とやかましいほど鳴きしきる。その鳴き声は互いにコミュニケーションをしている可能性が高いと調査で明らかになっている。「春めきて」きた嬉しさと声も上ずっているのだろう。「半音高く」の措辞が巧みである。

春隣道にチヨークの花模様

石井直子

寒かった冬もそろそろ終るころ。日当たりのよい路地であろうか。久々に外に出て元氣いっぱい遊ぶ子ら。路面には「チヨーク」で花や丸、三角などの模様が描かれている。子供たちの明るさが「花模様」に表われ「春隣」と呼応する。

梅東風や一輪ひらきそめし庭

嶋田洋子

三世代異なる顔の雛人形

小島喜代子

春のさきがけとしてひらく「梅の花」。春といつても寒さが残る「東風」であるが、庭の梅がはやも一輪咲き初めたのである。梅の咲くのを待ち望んでいた気持ち表われている。やつと咲いた梅に、春が来たとしみじみ実感している。

冬空に笛鳴り響きノーサイド

三森恵子

御祭警蹕けいひの声闇に満つ

横山礼子

代表的な冬のスポーツの「ラグビー」。楕円形のボールを抱え、追いかけて、ひたすら走る競技。見ている側も熱くなる。冬空に高々と立つポール。そこを目がけて蹴り上げるボールは吸い込まれるようだ。「ノーサイド」の笛で試合終了だ。

校門の日の丸の下入学す

柳父はる

箱根路の襷の色に淑氣満つ

菅原靖子

かつての入学式は桜の花の咲くころであったが、近年は葉桜になっていくことが多い。校門に掲げられた「日の丸」。今でもあるのだろうか。胸に付けた大きな名札は今ではないのだそうだ。そんなことを思い浮かべながら拝読した。

朝焼けのデルタに遊ぶ都鳥

稲野幸子

高杯に手の届くたけ雛あられ

石井妙子

「デルタ」は「三角州」のことで、大雨などで流されてきた土砂が河口に堆積してきた三角形の州である。すけるような「朝焼け」の汀に群れる「都鳥」の声が聞こえそうだ。

かわいいうである。「高杯」は「高杯（たかつき）」であろう。高杯に盛られた「雛あられ」に幼子が手をのばしたのだ。高杯の高さを幼子の手で表現したところに工夫が見られる。

「御祭」は十二月十七日に行なわれる奈良・春日大社若宮の祭礼。「警蹕」は社事の際のさきばらいのこと。「おしおし（＝静かに）」などといって追いたてる。その声が闇に吸い込まれるようにひびく。「闇に満つ」が床しさを物語る。

一月二日・三日に行なわれる「箱根駅伝」。数々のドラマを生んできた伝統のある競技で正月の風物詩である。各校の「襷の色」は決まっていて校風を象徴している。学生の青春を懸けた真剣な眼差しと「淑氣満つ」がびたりと合致する。

句集喝采

菅原卓郎

◆小池旦子「馬鈴薯の花」

志岐坂書房

著者略歴 昭和十一年東京都江戸川区小松川生。昭和五十一年「野火」入会。平成二十一年「野火」同人。平成二十三年青霧賞受賞。平成二十五年「野火」八百号記念賞受賞。令和五年功労賞受賞。俳人協会会員。

八海山の麓の南魚沼で趣味の畑仕事や吊るし雛作りに励んでおられる作者の第一句集。旅先や地元の花々をテーマにした作品が多く力みの無い句風である。

安曇野の三連水車秋日差す

花篝消えたる闇に人の声

栄螺堂五月の風の吹き衣被

八十五歳恙なく生き

第二句、桜を照らし上げる灯が消えても花見衆が名残惜し気に騒いでいる。桜ならではの光景である。第三句、会津若松の飯森山を下りてくると栄螺堂があり螺旋状の階段は一方通行で人とすれ違うことはない。その階段を五月の爽やかな風が吹き上って行く。堂内の観音様も心地よかるう。

田の雪解促す灰を花と撒く

梅雨寒の番屋に煤け潮見表

新涼の濠に天守の影澄めり

原発の沖をはるかに烏賊釣火

第二句、嘗てニシン漁で賑わった番屋に煤けて読めなくなった潮見表が今でも残っている。梅雨寒の季語がいい働きをしている。第四句、何事もなければ平穏なはずの原発だが東日本大震災での惨状は忘れることはなからう。願うことは一にも二にも安全である。原発と烏賊釣船の取合せが面白い。

◆藤本一城「紅葉川」

角川書店

著者略歴 昭和三十三年京都市左京区生。平成十九年東海俳句懇話会「笹」入会伊藤敬子に師事。平成二十一年「笹」吳竹賞受賞。平成二十六年「笹」朱竹同人。平成二十八年笹賞受賞。令和二年柴田鏡子に師事。俳人協会会員。

「冬銀河」に次ぐ作者の第二句集。平易な言葉遣いでリズムカルな句が持ち味である。師の一俳句は詩でなければならぬ」との教えを旨に句作に励んでおられる。

手庇に海鳥さがす秋遍路

時間割の画鋏を残し卒業す

一人づつ雛を醒まして飾りけり

民宿の昼の静寂鹿尾菜干す

第一句、秋の遍路も阿波の国から土佐路へ入ると毎日が大海原を見ながらの巡礼となる。休息時に海鳥を探す日がこれから何日も続くのである。土佐路は兎にも角にも長い。第三句、箱から取り出すお雛様を揺さぶったり声を掛けたりして覚醒させるとは正に言い得て妙な表現である。一年の眠りから目覚めさせるのは骨の折れることであろう。

床の間の壺中の闇に白菖蒲

悪役の素顔は気弱鬼虎魚

抱け子の心音を聴く花火の夜

引力のやさしき日なり朴落葉

第二句、鬼虎魚は見た目と反して白身で大変美味なる魚である。悪役も同様で素はシャイで生真面目な人物が役を担っているのだ。第三句、花火の打ち上げから開花までの静寂に我が子の心音が微かに聞こえた。静と動を子供への鼓動で表現した一句。親なればこそその感性であろう。

風 声

○俳句四季五月号「季語を詠む」欄

アイスクリーム美味し三三九度の夜

鬼之介

○俳句四季五月号「四季吟詠選者競詠新作10句」欄

「春の趣」

ものまね師匠よみがへりしか匂ひ鳥

埼玉選者山本鬼之介

慰めてほしくば来よと猫柳

主夫椽に憩ふひと時しだけれ梅

二の膳に郷の青饅底光り

池温み話題遙かよ「人面魚」

千枚通し眠る箆笥や春の闇

淡雪やゼロ番線のあるホーム

部屋の隅まで逃ぐる丸葉春の宵

「染み抜き」の手書き看板さくら東風

章魚は蛸大風と化し海原を

○現代俳句五月号「第二回現代俳句『風を詠む』」欄

白球のかげろふや一閃の風

秋谷風舎

山際に鈍色の雲浅き春

池田雅夫

水温みため息洩らす百葉箱

大塚茂子

絵馬鳴らす二月の風の文殊堂

越田栄子

かちんこや騎馬軍疾駆する春野

近藤徹平

春眠や髭の獵師の空鉄砲

渋谷きいち

ふらり来て土筆を摘むや日和下駄

染谷風子

紅絹の裾ほのと見する歩花曇

丸山マシミ

春の海潜水服の干されあり

島津初花
鳥羽和風

○好日（高橋健文主宰）五月号「受贈誌御礼」欄

寧日や春禽を追ふ連写音

鬼之介

○玉梓（名村早智子主宰）五・六月号「他誌拝見」欄

部屋の灯を消し鱈酒の青火かな

鬼之介

○暖響（江中真弓選者）五月号「他誌散策」欄

水明二〇二六年二月号を門馬愛子氏が鑑賞

「今月のかな女」で主宰山本鬼之介が一句鑑賞している。

淡雪に母臨終の静かなる かな女「龍膽」「雨月」

主宰山本鬼之介詠「月の浪漫」八句より二句

白魚や錫の銚釐が売りの店

寧日や春禽を追ふ連写音

一句目、春の宵、白魚料理で酌み交わしているのだろう。

気に入りの店で酒を楽しんでいる。錫製の銚釐は美しい。

二句目、春の鳥の囀りが賑やかだ。飛び立っている。

連写音のする平和な日だ。

「今月の巻頭句」五句より三句

宵闇の花枝の香や仄か

森本早苗

谷戸深く色を尽くして冬紅葉

梅澤佐江

琴の音の月へと昇る母の琴

綿引まりこ

○菜の花（平賀節代主宰）五月号「諸家近詠」欄

心根よ津軽訛の雪女

鬼之介
（日高道を抄出）

網野月を選

山紫集

数珠子飼ふ蝌蚪の進化の面白さ

田中章嘉

池の中蝌蚪の織り成す点描画

反町 修

日を追うて見せたる蝌蚪の早替り

丸屋詠子

池の蝌蚪吾右行けば左行く

小林京子

——以上特選

蝌蚪生る草書行書の身のくねり

綿引まりこ

蝌蚪に足蛇足だなんて言はせない

青木鶴城

蝌蚪や尾の波風たてず生き延ぶる

秋谷風舎

棒切れに蝌蚪ゆらめきぬ餓鬼大将

新 曆文

子どもより親が夢中におたまじゃくし

阿部幸代

父の忌の兄弟げんか蛙の子

新井のり子

ガリバーの影に戦く蝌蚪の群れ

荒井俱子

オーウェルの一九八四蝌蚪の国

檜鼻ことは

群るること嫌ふものをり蝌蚪の池

石川理恵

母方は八男三女蝌蚪の紐

皆川更穂

蝌蚪の目は二つか汝も同じ顔

吉川拓真

タピオカを啜れば見ゆる蝌蚪の紐

福田千春

ひよつとこの口して蝌蚪の生まれけり

横山君夫

蝌蚪の群れおしあひへしあひ夏を呼ぶ	飯田忠男	この池や向かうの沼に蝌蚪の群れ	倉田星歩
足生えてこちら見てゐる蛙の子	池田珪子	有平棒をくるくる見上ぐ蝌蚪の群れ	河野はるみ
手足出で蝌蚪の尻尾の昇天す	池田雅夫	固まれる数珠子ピオトープの底深く	小山あつ子
水底の白く流れて蝌蚪は黒	石関六弦	蝌蚪のみておたまじやくしに脚が出る	佐々木史女
被写体は4Bでかく蛙の子	石田慶子	子等の目を一瞬奪ふ蝌蚪の紐	笹本啓子
蝌蚪およく見るを待たずにさ迷ひて	糸井しるく	ぬるま湯に浸かり出られぬ蛙の子	渋谷さいち
蝌蚪溢れ用水どつと黒くなり	梅澤輝翠	蝌蚪生るる二頭身なる宇宙人	清水桂子
蝌蚪の紐円周率を聞かれても	梅澤佐江	蝌蚪生れて水の乱るる神の池	下川光子
朝なसान淀の支流に蝌蚪生る	遠藤人美	被災せし荒地をちこち蝌蚪の陣	霜多光代
一時の保育園めく蝌蚪の群	岡田宣子	はらからの切れぬ紐帯蛙の子	菅原卓郎
バケツの中に特大の蝌蚪気付かぬ親	川島夕峰	跳ねるまで泳げ蛙子玉のごと	菅原真理
森の葉に命繋いで蝌蚪落つる	北山建治郎	田にやすむ蝌蚪おどろかせランドセル	杉浦千祐

水面に手櫛使へば蝌蚪揺るる	鈴木藻好	蕎麦屋開き蝌蚪動き出す軒の池	野口和子
光を追ひて忙しなき蝌蚪の群	鈴木玲子	畦道や小川の淀に蝌蚪生まる	野村美子
蝌蚪の紐男の子女の子よく育て	関谷多美子	湧水に蝌蚪の固まり黒々と	畑宮栄子
生命は水の中から蝌蚪の紐	染谷風子	蝌蚪の子や名前もろたか父母に	原田自然
水底の押しくらまんどちゅう蝌蚪の群	高橋満耶子	今風のシェアハウスなり蝌蚪の紐	原田秀子
水草に見え隠れなる蝌蚪の紐	武田重子	泥の池うようよ生まる蝌蚪の国	樋口元美
意志持たぬ歩兵のごとく蝌蚪の群れ	田中弘子	蝌蚪に足明日は小学一年生	日高道を
切ればもう赤の他人よ蝌蚪の紐	寺内洋子	今暗渠かつては蝌蚪の出身地	平野 楽
隠り沼に蝌蚪の樂園水ひかる	寺町知子	遺伝子の数ほど群るる池の蝌蚪	保坂翔太
一畝に素早く散るや蝌蚪の陣	飛永 鼓	裸婦像の佇む池に遊ぶ蝌蚪	曲淵徹雄
蝌蚪増えし一人住ひの屋形かな	南條さわゑ	大仰に噂の尾鰭蝌蚪の紐	正木萬蝶
山の湿原蝌蚪のオアシスありにけり	西幅公子	水入れてやりたや蝌蚪の呻き声	松宮保人

蛙の子善悪は無し生か死か

松村笑風

徒に散らしてみたり蝌蚪の群れ

山中いちい

蝌蚪も人も継がり合へば生きらるる

宮崎チアキ

池に入りタオルで掬ふ蝌蚪の群

湯浅 和

縄張りを欲しがらるまでの蝌蚪の国

室井早都子

鬼子なる蝌蚪ちんまりとおちよほ口

横山礼子

蝌蚪の紐そろそろと解けゆく

持永喜夫

漆黒の勾玉のごと蝌蚪生る

元田亮一

ヒーローに変身したき蝌蚪の夢

本橋稀香

蝌蚪生れて見知らぬ顔も覗きをり

森 和子

命とは波か光か蝌蚪の紐

森下山菜

澄む池にしつぽふりふり小さき蝌蚪

森下美智枝

蝌蚪すくふ子等の歓声野にひびく

山岸久美子

夕茜まつすぐ呑んで蝌蚪の紐

山下ユリ子

田の底に同体の影蝌蚪止まる

山戸美子



山紫集作品評

網野月を

オーウェルの一九八四蝌蚪の国

檜鼻ことは

二十世紀の名著一〇〇冊になっている『一九八四』のことである。ジョージ・オーウェルが一九四九年に発表したディストピアSF小説である。ディストピアとはユートピアの対義語である。その前提条件の中で、作者は「蝌蚪の国」をどのように把握しているのであろう。つまり「蝌蚪の国」の寓意をどのように解釈したらよいのかということである。筆者は「蝌蚪の国」をディストピアとしてではなく、今なお残っているユートピアとして把握しているのであろうと鑑賞した。英文学を学ばれた作者ならではの箴言のような句である。

群ること嫌ふものをり蝌蚪の池

石川理恵

上五中七と座五の正反対のベクトルを取合せた句である。お玉杓子は種別によりさまざまだが、孵化して数日から十日くらいは群れをなして過ごし、後に個別の行動をとるようである。そうした群れのお玉杓子でも中には群れから外れ

るものがあるという意味である。群れを嫌ってそうしているのか、落ちこぼれて群れに追いつかないのかは人の目からは定かに分かるものではないのだが、作者は「嫌ふ」と解釈した。この「嫌ふ」という見立てに句中に作者の存在を感じさせるものがある。

掲句はお玉杓子のことであろうけれども、また人間世界の理とも解せる。個人主義の方でもみんなて居ることの愉しさを味わってみたいかがであろうか。

母方は八男三女蝌蚪の紐

皆川更穂

お母様の兄弟姉妹は十人を数えるということなのである。将に蝌蚪の群れは兄弟姉妹の集団である。日本も嘗ては子沢山が当たり前であって、また誉とした時代もあった。座五の季語「蝌蚪の紐」は人間社会の紐帯を引き出しているようだ。何やら唱歌「めだかの学校」を彷彿とさせるものがある。

蝌蚪の目は二つか汝も同じ顔

吉川拓真

中七の「汝も」は、誰が誰に対しての言葉であろうか。筆者は蝌蚪が人間である作者に問いかけた言葉であると勝手に鑑賞した。単眼や複眼と言った動物も存在するのだが、一見左右対称に目の位置が決まっている動物が殆どのように思う。先祖が同一である蓋然性を言い当てているのである。同じ仲間であるな、とお玉杓子から問われているような感慨である。

タピオカを嚙れば見ゆる蝌蚪の紐

福田千春

「タピオカ」の形状と質感に蝌蚪の紐、つまりカエルの卵を連想したのだろうと推測する。「蝌蚪の紐」を嚙ることはないのである。つまり「タピオカ」を嚙って「蝌蚪の紐」を惹起したのであって、決して「蝌蚪の紐」から「タピオカ」を連想したのではないのである。

ひよつとこの口して蝌蚪の生まれけり

横山君夫

「ひよつとこの口」の見立てがこの句の肝である。どこまで似ているかは議論する所ではなくて、「ひよつとこの口」の措辞が面白いのである。このような句の場合、〈私には、ひよつとこの口には見えない〉と評する輩がいるのだが、論外である。合わせて「ひよつとこ」の存在、つまり本質が「蝌蚪」の修飾として奇抜なのである。オリジナリティーがあるのである。火男の火を吹く時の顔つきと一所懸命になつていゝ様子の滑稽さも加味されている。

数珠子飼ふ蝌蚪の進化の面白く

田中章嘉

中七の「進化」は何を意味しているのであらうか、考えさせられる句である。両生類のいわゆる幼体から成体への変態のそれでは面白くない。約四億年前からカエルの属する両生類が地球上に出現して、「進化」を続けているのである。年に一度の産卵とすれば、四億回の「進化」のチャンスを経てきたことになる。その超微細な変化は人の感知するところではないと思われるが、作者はその変異を感じ取ろうとしている。悠久に揺蕩う作者の心魂が面白い。

池の中蝌蚪の織り成す点描画

反町 修

蝌蚪、つまりカエルの幼生は孵化するとはばらくは群生して過ごすようである。その際の将に「点描画」的な水中の光景は「織り成す」といつて相応しい。これから元気に育ってくれよという、新生のお玉杓子たちへの作者のエールであらうか。

日を追うて見せたる蝌蚪の早替り

丸屋詠子

種によつても異なるが、ふつう蝌蚪は孵化して十日余りでは変態を始めるようである。幼生時の鰓と尾を失うのであり、後脚と前脚を具える形状が人の目には映るのである。失うものがあつてこそ得るものがある、何やら人間にも当てはまる必然なのであるが座五の「早替り」に込められたお玉杓子への愛惜を感じる一句である。変態は生物の進化の歴史を物語るものであるだけでなく、そこには両性類としての試練もまたあるのであらう。

池の蝌蚪吾右行けば左行く

小林京子

「蝌蚪」は鯉のように人影に寄つて来ないのである。つまり人影を避けるように逆方向へ身を躲すのである。上五の「池の」に隔離されたような、要はポジティブに鑑賞すれば深窓の令嬢のような風情も感受することが出来る。「吾」から見れば「左行く」のであるが、蝌蚪の身になれば「右行」きなのである。

鼓
笛
集

嘯に夢の解け行く朝ぼらけ
一人静旅の終はりの深呼吸
玉響の風と戯れ散る櫻
涙する十五の君へ卒業歌
消し難き留守番電話暮の春

暁の夢の在りかや春の森
春昼や「宿場」の古き小間物屋
百花繚乱人さまざまな春の夢
朝東風や足場たちまち昇る人
忘るるも赦すうちなり木の芽吹く

丸屋詠子
皆川更穂
綿引まりこ
本橋稀香
室井早都子
——以上特選——
秋谷風舎
阿部幸代
飯田忠男
石関六弦
糸井しるく

春風や心尽くしの挨拶句
黄金週間おかずのいらぬ筍飯
春の宵バーを醸すやハバナ産
春夕焼離陸の機体朱に染まる
大甕にどんと活くるや花辛夷
さくらさくらよ咲かねば歳も取るまひに
半世紀住みて団地の花と友
春の日や富岳を過る新幹線
トンネルの先に広がる春の海
いつのまにボクからオレへつくしんぼ
落ちてなほ生気溢るる紅椿
役目終へヒートテックや春の風
燕飛ぶ線を描きて自在色
マイカーは父のお古や新入生
清姫の情念をうつす藤の花
永き日や伝言板の残る駅
啄木忌靴に古りしコッペパン
春光に露座仏のほほゆるみある
花冷や目を伏せてある待ち合わせ
草餅のぶらりと橋を渡りをり
橋中の仙や地元を春を見る

遠藤人美
川島夕峰
北山建治郎
倉田星步
小山あつ子
杉浦千祐
関谷多美子
反町 修
武田重子
田中弘子
寺町知子
樋口元美
平野 楽
松村笑風
持永喜夫
元田亮一
森下山菜
山下ユリ子
山中いちい
横山礼子
吉川拓真

鼓笛集作品評

青木 鶴城

轉に夢の解け行く朝ぼらけ 丸屋詠子

夜が白み始める頃、鳥の囀りとともに目が覚めた。眠りの中で見ていた夢が時間と共に朧になってゆく情景を「夢が解け行く」と上手に表現した。「朝ぼらけ」が、ほんやりとした記憶と相まって句の効果を上げている。作者にとっては解けて欲しくない夢だったのであろう。

一人静旅の終はりの深呼吸吸 皆川更穂

季語「一人静」の花言葉が「隠された美」「静謐」ということから、誰かに会いに行つた一人旅を連想させる。帰ると一人静が咲いていた。ほっとしたのか、旅の余韻に浸っているのか、果たしてこの深呼吸吸は何を意味するのであろうか。季語の取り合わせが秀逸である。

玉響の風と戯れ散る櫻 綿引まり子

玉響（たまゆら）は勾玉（まがたま）が触れ合つてかすかな音を立てる様子から転じた「ほんのしばらくの間」「一瞬」を意味する大和言葉。桜が一瞬の風に吹かれ散つてゆく様子を古典的に表現した秀句。「戯れ散る」が素晴らしい。

涙する十五の君へ卒業歌 本橋稀香

卒業式の景を詠んだものであるが、「十五の君」で卒業は中学校であることが分かる。作者は在校生と共に「十五の君」

へ卒業歌を贈っているのである。きっと作者の目にも涙が光っているに違いない。君への「へ」が功を奏している。

消し難き留守番電話暮の春 室井早都子

思わぬ人からの留守電。勇んで電話を返し、会話は済んでしまった。普段なら用無しの留守電はさっさと消去してしまうのに、消すのを躊躇う作者の健気な心が句になった。普段の生活の中から生まれた読者の共感を誘う作品。残り少ない春を慈しむ心と相まった余韻を感じる。

投句頂いた句の中からもう少し推敲をすれば、もっと良い句になると思われる作品が有りました。新企画なので添削コーナーを試みます。参考にして頂ければ幸甚です。（作者の句意から外れるかも知れませんがご容赦ください）

○暁の夢の在りかや春の森

春暁の夢の在りかや秘密基地

夢の在りかが春の森では漠然過ぎるので、秘密基地にしてみました。秘密基地には夢があります。

○春昼や「宿場」の古き小間物屋

春昼や「宿場」に古き小間物屋

「の」を「に」に変えるだけで、小間物屋を発見したことになります。「の」だとずっと存在している小間物屋のニュアンスです。

○百花繚乱人さまさまな春の夢

百花繚乱人さまさまに春の夢

「な」を「に」に変えることで、単なる定理から人がそれぞれ能動的に夢を見る意味に変わります。

○春の宵バーを醸すやハバナ産

春の宵バーに燻らすハバナ産

通にはハバナ産がタバコだとピンと来るかもしれませんが、醸すではタバコだとの認識に難があります。

○春夕焼離陸の機体朱に染まる

朱に染まる離陸の機体春夕焼

原句は、まず春夕焼けの状況が浮かぶので、朱に染まった飛行機が当たり前の景、離陸する機体が何故朱に染まったか・・・そうか夕焼けだったのか、と思わせるのが手です。

○大甕にどんと活くるや花辛夷

大甕にどんと威張らせ花辛夷

ただ活けるだけより表情を加えることで句に動きを与えることができます。

○さくらさくらよ咲かねば歳も取るまひに

さくら咲かねば歳も取るまひに

字余りが気になります。「桜咲く」と実際に咲かせて、咲かなかつたら歳も取らないのにね、とします。

○半世紀住みて団地の花と友

半世紀住みて団地の友と花

「花と友」がきちんと解釈できません。「友と花」だと友が出来て花も愛でて、或いは団地の友と花見をしている、の意味になります。「花が友」も有りです。

○役目終へヒートテックや春の風

春の風ヒートテックと離別する

「役目終へ」が散文的です。敢えてドキッとするような言葉を幹旋すると句が斬新になります。モダンな言葉には古い言葉が似合います。

○燕飛ぶ線を描きて自在色

初燕自由自在の二次曲線

原句の自在色の意味が取れません。燕の体の色が七色に変化して見えるということでしょうか。飛び回る飛行曲線に焦点を絞って二次曲線を描くとすれば斬新さが出ます。

○マイカーは父のお古や新入生
マイカーは父のお下がりで新入生

大学新入生ですね。確かに父上のお古のマイカーでしょうが、ここは「お下がり」の方がユーモアが生まれるのでは。

○清姫の情念をうつす藤の花
清姫の情念見たり藤の花

この句の場合は「じょうねん」の方が良いと思いますが、ルビも旧かな遣いでないといけません。またルビを振って強引に違う読みに誘導するのは良くありません。

○春光に露座仏のほほゆるみある

露座仏のほほのゆるみや春景色

俳句は結論を先に言わないのが基本です。また、「ほほのゆるみ」だけで「ある」は省略できます。一句仕立てではなく、「や」切れにして、ほほのゆるみを強調してみました。

○永き日や伝言板の残る駅

永き日や伝言板に残る文字

今や懐かしい伝言板ですが、確かに古い駅に伝言板が残っているのを見かけることがあります。駅へのフォーカスより

書き残してある文字にフォーカスする方がインパクトがあるのでは。

○草餅のぶらりと橋を渡り

草餅やぶらりと渡る太鼓橋

原句だと草餅が橋を渡っています。「や」切れにして橋を太鼓橋にすると景がより具体的になります。

○橘中の仙や地元を春を見る

橘中の仙や地元の路地に春

橘中の仙とは、大きい橘の実を割ると中で仙人が碁を楽しんでいた、という中国の故事から囲碁を楽しむ人の意味。春になり、屋外に出て囲碁を楽しむ地元の名物が始まった、という句意にしました。

水明発展基金御礼(敬称略)

— 令和八年五月三十一日現在 —

山本鬼之介	100	□	下川光子	3	□
保坂翔太	5	□	笹本啓子	10	□
元田亮一	10	□			
			合計	128	□
					□

若松例会（京橋）

正木萬蝶
石田慶子 報

亀鳴くやA Iに無き夢と羞
あいの風入船の灯の見え隠れ
灯台に寄り掛からんと雲の峰
亀鳴くや耳を澄ませば月に雨
亀鳴きて暖簾をくぐる時宜を得る
狛犬の阿吽に応へ亀鳴けり
瓦斯灯や独り卯月の馬車道を
亀鳴けり齋れて亭ふ月あかり
亀鳴くや空飛ぶ夢を見なくなり
亀鳴くや月の兎が耳を立つ
モノリザも齢五百や亀の鳴く
亀鳴くや子供だけしかあない村
ふるさとの門灯うれし夏はじめ
亀鳴くや逢魔が時の胸騒ぎ
月の裏兎に遣らずと亀鳴けり
春の月得難き夫は昼行灯
亀鳴くや導師の喝に魂を見る
亀鳴くや地球の悲鳴続く揺れ
大和路の水の鼓動か亀鳴けり
亀鳴くや大仏の顔微笑みて
常夜灯の誘ふ茶寮暮の春
箔置のかすかな歪み亀鳴けり

月を
マスマ
星歩
京子
はるみ
詠子
萬蝶
以上特選
月を
邦人
はるみ
稀香
京子
詠子
千春
ひろこ
千祐
鶴城
慶子
マスマ
星歩
佐江
萬蝶

昔話あれこれ 58

丸山マスマ

隆家公

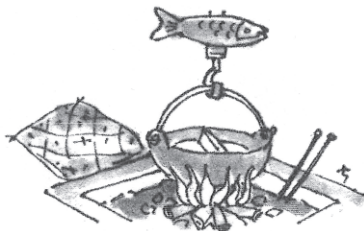
隆家公は、伊周公の同腹の弟で、十七歳で中納言になったが天下のやんちゃ坊主と言われた。兄伊周公に連座して出雲権守に左遷された。伊周公が赦された時、隆家公も赦されて中納言に再任され、賀茂の祭の時、道長公のお供を勤めたが隆家公は、行列の後方に控えていた。道長公は、気の毒に思い、彼を自分の車に乗せた。車の中で打ち解けた話の序に、道長公は、「先年の配流の件は、私が奏上して執行したと世間で言われているが決してそうではなかったのですよ」と本気になって話した。

隆家公は、昔のように広く交際することも無く、やむを得ない時以外は外出もしなくなっていた。ある時、道長公の土御門殿で、遊宴が催された時、道長公は、「こういうなあ」と言っていて、別には、物足りないなあ」と言っていて、特別に隆家公を誘った。その間に参会者は盃を重ね酌し、衣服の紐を緩めなどして、寛いでいた。

そこへ居すまいを正した隆家公が参上したので、座の雰囲気が固くなった。道長公は、「早くお召し物の紐を解いてお楽に」と、促したところ、公信公（兼家の弟為光の六男この当時、参議で正四位）が「私が紐をお解き申そう」と近寄ったところ、隆家公「当時、従二位・中納言は、「私は不幸な目に遭ったが、お手前たちに体に触れられ勝手なまねをされるような身ではない」と荒々しく言ったので、道長公は、カラカラと笑い、「今日はこのような戯言は無しにして頂こう。私が紐をお解き申そう」とはらはらと紐を解いたので、隆家公は「これなら不足はありませんよ」と機嫌を直し、盃を重ね、普段より羽目を外して興じた。道長公も歓待なさった。

隆家公の矜持

各地
句会



水明熊谷句会 (熊谷)

愛想よき間口一間種物屋
遠霞記憶の奥に木炭車
樂園のごとく秩父路花見鳥
種物の神秘を探るダーウィン

茂子
風子
徹平
秀子

向日葵の種送りたきウクライナ
霞晴れ岩ごとく牛となる
どたキャンの友の言訊春霞
春霞舫ひの船の見え隠れ
螢火と見紛ふ明かり村霞
幼子の露地の落書春驟雨
若狭水明俳句会 (若狭)

忠男
君夫
栄子
道太
翔太郎
卓郎

廃校の木造校舎遠郭公
先生と呼ばれ乾杯生ビール
郭公やクルスの墓の混ざる苑
郭公の声に生まるる湖の波紋
人も居ぬ庭先を舞ふ春落葉
嫁いでも部屋はそのまま遠郭公
二つ名のひめやをとめの苺摘む

翔太
夕峰
徹雄
まりこ
寿夫
風子
卓郎

春炬燵何時か一人となる二人
陽炎や対岸に浮く発電所
陽炎やゆがむ線路にゆがむ汽車
難しき話は為まい春炬燵
陽炎や乱る即座の車間距離
陽炎や脱線しそくに電車来る
生ぬるい返事してをり春炬燵
春炬燵仕舞ひ忘れて母の席
陽炎の路上を走る飯免許
陽炎や一輪車を押す母の影
揉め事の徐徐に和みて春炬燵
陽炎や鉄路の揺らぐ無人駅
外に反る妻の小指や春炬燵
うさぎ鬩友と仕掛けた里の山
りんどう俳句会 (浦和)

郁子
風花
風湖
ことは
祥子
自然
友鼓
初夏
保人
夕月
和風
笑風
寛久

野菊の会 (与野)
老害や眼チカチカ緑なす
おがたまの花咲く社奥深し
劍玉の世界一周夏蜜柑
休憩の屋上庭園風薫る
蝌蚪の会 (浦和)
水面の雲に植ゑたり田植かな
炎帝に願ふ気温の平静を
別れ歌夏の月だけ聴いてある
尻もちのどろんこ坊主初田植
歓声の泥にまみれて初田植
炎帝が水の地球を炙りある
炎帝を待ちに待ちたるピーチかな
大声で音はずす奴田植を唄
新緑や弥撒を潤す聖歌隊

和子
清子
恵子
光子
五朗
ひさの
礼子
幸子
元美
秀子
風舎
月を
宣子

コクーンシティカルチャー俳句教室 (さいたま新都心)

曲舞の蝶が出て立つ神楽殿
曲り角一つ間違ふ朧の夜
警策ののちの静けさ鳥交る
父と子の絵本コーナーこどもの日

蘭の会 (浦和)

会釈して過ぎゆく人や夏霞
菖蒲湯や弾む会話の父と子と
巡礼の一期一会や五月晴
立夏なり海迫り上がる水平線
ニンフかと泉に映る己が影
夏立てり唄ふ童の姿かな
小石投げ泉の光揺らしけり
夏来る突然の来客のごと
集ひ来て比企の走り茶一会かな
ひつそりと崖下に泉里薫る
再会の約束果たす夜の薄暑

新樹の会 (浦和)

感激を背中に乗せて入学す
三弦に昭和の余韻柳影
激戦の空しき空や雲雀鳴く
春時雨しだれ柳に雨宿り
江戸電の煽れば踊る若柳
江戸細柳の糸の触れたがる

たかな俳句会 (川口)

境内の屋台解かれて花曇り
一推しの演技派女優紫木蓮
春の昼寡黙な役を演じをり
花曇り学童帰りの一年生
善人を演じし後の春の風邪
不忍は変はらぬ人出養花天

円卓の会 (浦和)

花冷えや少女の胸に星条旗
若返りの妙薬探す春の山
熱熱のラテ花冷えのテラス席
インフレがそろりそろりと春の風
桜鯛ふてくされ顔姉に似て
花冷えや夜泣き地蔵の与願印
夏近し変しい変しい新子さん
初宮や祝ひの膳の桜鯛
桜鯛忘れてしまへ悲しきこと

樫の会 (浦和)

朱を白に色分けしたる木瓜の花
数独の軽き苛立ち木瓜の花
花粉症いたはりあへり電話口
花粉症鼻声なんと可愛らし
とげちくりかはゆい木瓜の花は魔女
花粉症バッグにティッシュと目薬と

若枝句会 (浦和)

隣見て名刺交換新社員
行く春や散りしく花弁朝集む
行く春のカーテンコールソワレかな
春陰の名代の蕎麦や異国人
行く春や奥入瀬川の根雪消ゆ

めだか句会 (浦和)

土筆摘む父子の横顔瓜二つ
春句会テーブル横に菓子あふる
野良犬に遠足の列崩れけり
葉桜や横丁の店に人の列
穀雨舞ふ赤花黄花咲きし庭
遠足やエプロン結ぶ午前五時
春疾風犬の横顔たくましき
遠足や斜面に咲きし黄色帽
公園に響く横笛春うらら
夕コはまた横紙破り霜の果て
横政が罷り通る世春を送る
田を渡り横笛のする卯月風

青葉の会 (浦和)

沈みゆく陽の色淡し弥生空
祝ひ事多く弥生の忙しなく
弥生の空見上げつ思ふ遠き子を

昇	俱子	由美子	和子	小麥	まりこ	風子	しゅうご	寿夫	夕峰	月を	風舎	京子	清吉	風子	道を	徹雄	鶴城	義子	小麥	みち	のり子	鶴城	輝翠	翔太	道を	拓真	卓郎	京子	月を	鶴城	裕誌	富子	文子	あつ子	朋子	千重子	みどり	敏江	貞代	泰生	泰子	和子	六弦	章嘉	莊志	美津子	尚己	恵美子	道代	月を	はるみ	知子	久美子	桂子	美紗子
---	----	-----	----	----	-----	----	------	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	----	-----	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	----	-----	----	----	-----	----	-----	----	-----

弥生満月静かに入江照らしをり 語り部の「南部曲り家」春惜しむ 乙女椿が誘ふ家や曲屋よ 少女らの制服光る弥生かな 弥生かな膝を離れぬ犬と居り 曲げわつば唐揚げ詰めて花見会 中学生に部屋宛がふる弥生かな 秩父路の総開帳の弥生かな	小梅の会 (浦和)	臘月破屋を包む優しさよ 山路下る里の外れの糸桜 花殻を摘む母の背や春日入る 夏を待つ日比谷野外音楽堂 羽田へと東風に向うてアプローチ 春の服野暮な男の一張羅	芙蓉句会 (浦和)	春耕や土の力をとりもどす 沖を往く巨船遠見に磯遊び 強東風に我が踏ん張りも力尽き	柿の木塾 (浦和)	暗闇の聴力検査亀鳴けり 亀鳴くやがん検診を受けやうか しやばん玉空に誘はれ空となる
真理 美子 美智枝 公子 啓子 和子 洋子 輝翠	隆然 進 隆文 啓子 道	恵子 隆文 啓子 道	税子 仁 美子	昇 昇 昇	節代	節代
童宮の姫に失恋亀の鳴く 亀鳴くや古墳の埴輪歌ひ出し しやばん玉母子写して飛んで行け	越後の会 (浦和)	知覧新茶白磁に落とす翡翠色 町から見上げ送り火の跡山笑ふ 見知らぬ街を歩くときめき花蘇枋 立山連峰湾を照らすや山笑ふ 田畑には祖父祖母嫁や山笑ふ	芽吹句会 (浦和)	行く春や老いの坂道緩やかに 音もなく歩道しめらす花の雨 卒業式送る教師の優しき眼 霊園の供花を蘇生の花の雨 花の雨ホットミルクと角砂糖 移りゆく色さまざまに行くや春 花の雨両手に重き上下窓 訪れて聞きしに優る藤の棚 岩崎邸出てそぞろ行く花の雨 花の雨駈足で行く画学生	なごみの会 (浦和)	「駈足」を履いて入学靴光る 種物屋間口一間小座布団
章嘉 恵子 和子	輝翠 知子 真理 宣子 翔太	チアキ 富子 千重子 修	おにこ 久美子 ひろこ 玲子 弘子 道	茂子 喜恵	喜恵	喜恵
青き踏む足びつたりのベビー靴 繫留の舟の足つ緒春の雨 種袋振れば命の音聞こゆ	若鮎句会 (浦和)	砂時計の砂はパステル啄木忌 春空へ「無罪」掲ぐる弁護団 袖からのぞく裾裏紫荊 名を知りてより鮮やかにハナズハウ 乙女らの恋話あふる紫荊 句のもの来て気忙しや啄木忌 古希に添ふる赤紫やはなすはう 母の背に負はれしことも紫荊 指の砂拭ひつくせぬ啄木忌	和歌山水明句会 (和歌山)	花の雲はるけき一日よみがへる さへぐりに心奪はれ歩を延ばす 河津桜黒ランドセルしよつてみる 足枕を少し高めに目借時 蕙咲く引越し後にひつそりと 近頃はをともネイル木瓜の花 蓬生や雨後のふるへの雲雀の子	水明濁つくし句会 (大阪)	春尺や切株白き過去の道
和葉 かつ子 節代	稀香 山菜 秀子 真貴	ひとみ 芳春 月を 喜夫	和子 千枝子 千世子 満耶子 きわゑ 洋子 廼代	智恵子	智恵子	智恵子

春陰や白白として売家札
春深し家を売れとのちらしあり
目玉ばかり群遊不気味蛸蚪の沼

人美
ノルン
洋子

珊瑚の会 (浦和)

傘立に大小の杖穀雨かな
山吹や介護学校入口に
穀雨かな下ろしたてなる庭の下駄
山吹のなだるる水路鯖街道
けふ穀雨強飯の噴く厨土間
白山吹の垣根葦毛の佇めり
穀雨かな農機具小屋を全開に
平飼ひの鶏の脚力穀雨かな
風波や白山吹に黄山吹
かすかな風に反り身のわたし穀雨かな節

和葉
かつ子
喜恵
マスマ
昇
恵子
史代
広子
和子
京子
弘子
樂
風舎
久美子
操
宏治
美津子
真由美

若葉風俳句に恋し無心なり
絵画展春の名残の上野かな
鶴川山百合句会 (鶴川)

直子
鶴城

塙保己一の拓本を取る花の冷
一滴の水とて恵み竹の秋
若緑のみこまれゆく三輪車
つつまれて天女とならむ藤ま白
朧夜のとぎすまされし第六感
首伸ばす親子の亀や藤の昼
山藤の高きに咲ける木曾路かな
リハビリの杖を頼りに夕桜
藤の下らりるれろうまく言へなくて
草臥れて四阿に聴く春の鳥
きざきサークル (浦和)

史代
広子
由美子
千春
萬蝶
理恵
美千子
うさぎ
まどか
玲子
昇
啓子
由美子
俱子
和
満智子
和子

若楠句会 (浦和)

目の開かぬ猫の子やたら這ひ廻る
春かたみ花弁ひとひら本の中
指導者に良心ありや夏隣
行く春や十指の触るるそばの粉
早咲きの心許なき芥子の花
猫の子や日記の中の探し物
行く春を追うてみちのく白河の関
行く春のぐぐつと曲がる都電かな
子猫六匹名前代りのリボン付け

篤農の黒き腕や穀雨来る
穀雨なり槌音響く農具小屋
黙として作物日誌穀雨の日
火消し人今日は野焼の火付け人
落日がすくとと落つる野焼中
沈みゆく夕日の中の野焼あと
「穀雨の候」忙しくなると爺の文

水明夏行のご案内

下記の日程にて水明恒例の夏行を開催いたします。7月号に添付の「参加申込書」を使用し、参加費を添えて7月17日(金)必着で発行所総務部までお申し込み下さい。大勢の皆様のご参加をお待ちしております。なお、皆勤賞を用意しております。

夏行は俳句の基本の一つである「席題」で詠むことを勉強する場です。各日共に季語による題が一題、詠込みによる題が一題出題されて、計三句(第3日目のみ2句)を投句して頂きます。

- 【夏行】第1日目：7月29日(水) 13:00～17:00
／浦和コミュニティーセンター第14集会室
第2日目：7月30日(木) 13:00～17:00
／さいたま共済会館602号室(※ご注意ください)
第3日目：7月31日(金) 13:00～17:00
／浦和コミュニティーセンター第14集会室
※13:00に席題が発表されます。

- 【参加費】 各日1,000円
【申込締切】 7月17日(金) 発行所必着

事業部

第10回「水明塾」の講師決定!!

10月31日(土曜日)に催されます第10回「水明塾」は、午前中に講演会を企画しました。

今回は高柳克弘講師を招いて「芭蕉に学ぶ俳句の心」と題してご講演頂きます。奮ってご参加ください。

申込み等の詳細については、改めてご案内いたします。

【高柳克弘氏プロフィール】

1980年静岡県出身。「鷹」編集長、読売新聞 KODOMO 俳句選者、早稲田大学講師。句集に『未踏』『寒林』など、評論集に『凜然たる青春』『隠された芭蕉』など多数。

事業部

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。
希望者は、下記により作品を送って下さい。

主宰 山本鬼之介

【指導者】 網野月を

【作 品】 5句 [受講料] 1,000円

【方 法】 ①用紙自由 ②住所・氏名・電話番号を明記 ③110円切手を同封 ④返信用封筒は 不要 ⑤締切なしで随時受付

【送付先】 網野月を

電話 080-7580-0208

〒338-0012 さいたま市中央区大戸 1-31-2

俳句と随想12か月 波戸岡 旭・吉田千嘉子	連 載 二度目の俳句入門……………長谷川 權 季語を考える……………仁平 勝 編集室の風景……………榎俳句会	新連載 地域結社の巨人たち……………渡部有紀子 風の旋律……………中原道夫 セビア写真館……………久留米脩二	リレー連載 没後50年の俳人たち(萩原井泉水)……………今井 聖 いま、気になる俳句の言葉……………井上泰至	<h1 style="font-size: 4em;">俳壇</h1> <h2 style="font-size: 2em;">7月号</h2> 6月14日発売 定価1000円(税込) 巻頭エッセイ 井上康明	特 集 夏の俳句合わせ十五番 巻頭作品10句 はりまだいすけ・古田紀一・西山 睦 柴田多鶴子・檜林弘一・井上弘美 天野小石・村上鞆彦
	四季巡詠33句「第V期」……………岩岡中正・辰巳奈優美				八木 健 進 滑稽俳壇

本阿弥書店

〒101-0064

東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03(3294)7068 振替00100-5-164430

後記

七月号をお届け致します。今月は少々手間取りました。六月二十八日の水明全国大会兼題を同時進行したということもあるかもしれませぬ。引き続き皆様のご支援をお願い申し上げます。

奥付のページに（今月のはてな？）があります。水明は、文語口語にかかわらず旧仮名遣い（歴史的仮名遣い）を旨としています。もちろんルビに關しても旧仮名遣いを励行する方針です。が（今月のはてな？）はその性格上、このコンテンツのみ新仮名遣いを用いております。誌友・同人各位におかれましてはご了承くださいませ。最近、テレビで浦和に關連した番組を何度か見ました。「……散歩」とか「……の旅」などです。その中で「浦和絵描き」という言葉が出てきました。関東大震災以後、浦和にアトリエを構える画家が多くいらして、絵描きコロニアさんながらの様子を指した言い回しです。そこで、俳句の世界はと

いうと、「浦和俳人」という言い方も洒落ているなあ、などと勝手に考えたりしています。

ところで今年の関東は六月七日に梅雨入りしました。ほぼ平年通りということですが。この「平年通り」という言葉の安心感はどこから来るのでしょうか。昨今の地球温暖化に原因する異常気象や、加えて国際情勢を考えると、特に良好な年を希求するというわけではないのですが、いつもと同じ年であることを人心が求めているということなのだろうなあ、と思うのです。

近所に肢体の不自由な方がいます。その方は傘が上手く差せないで雨の日は半身ずぶ濡れになります。「大変ですなあ」と声をかけたことがあります、その方から「雨も降らなきゃ、困りますから」と返されました。汗顔の至りです。

これから一ヶ月余は梅雨が続くでしょうか。皆様、健康に気を付けてお過ごしくださいませ。

（月を）

今月のはてな？

- 苧環（おだまき）の花
- 遠敷（おにゅう）
- 鍔絵（こてえ）
- 宜候（ようそろ）
- 只管（ひたすら）
- 乾酪（かんらく）
- 鹿尾菜（ひじき）
- 鬼虎魚（おにおこぜ）
- 初諷経（はつふぎん）
- 諷（むくげ）
- 字（ひころ）ふ

76 74 60 ♪ 62 41 31 24 14 8 6 頁

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・火・水・木・金)

時間：12時半～午後4時半

(土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご利用の方は 時間内にお願ひします。)

水明

令和八年七月号

通巻一五〇号

令和八年七月一日発行

発行所

水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区摩西一〇二二

電話 048-822-4741

ホームページ

「水明俳句会」で検索

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費 (誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費 (誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三九三

発行人 山本 鬼之介

印刷所 中央美版

令和8年「水明夏行」

参加申込書 (申込締切 7月17日 (金曜日))

水明夏行 7月29日(水)	参加費 1,000 円	出席します
水明夏行 7月30日(木)	参加費 1,000 円	出席します
水明夏行 7月31日(金)	参加費 1,000 円	出席します

参加費合計 円

※「出席します」を○で囲んで下さい。

受付時間・投句締切時間をご確認下さい。

上記参加費を添えて申し込みます。

令和8年 月 日

住 所	〒		
氏 名		電 話	

申込書送付先

〒330-0064

さいたま市浦和区岸町4-10-21 水明俳句会

[緊急連絡先]

電話番号	-	-
氏 名		

※緊急時に備えて緊急連絡先をお届けください。

緊急時のみに使用し、他の用途には使いません。

※申し込まれた方で当日欠席の方は、下記へ連絡ください。

青木鶴城 090-6709-1367

季音抄

山本鬼之介

少年の夢はパティシエ夏蜜柑
さよならのひと言攫ひゆく卯波
赤人も芭蕉も過客緑立つ
巫女舞の白匂ひ立つ卯月かな
掌に受けし金平糖や春の山
靴下を好み色の色に花の雨
卯月ともなれば田毎の月を見に
吾が運は六白金星夏の霧
格子戸を放つ薄暑や宿場町
藤揺れてうすむらさきの風の色
田に畑に風こそ薫れ小字村
雨似合ふ町もあるらし白牡丹
羅にきりりと博多通し柄
初夏のざる一枚の至福かな
里山の暮しの遅遅と夕霞
悪役に楽屋見舞の桜餅
山祇の易きめざめや閑古鳥
鍬当たたる小石の音の冴返る

内田恵子
梅澤佐江
大橋迪代
大場順子
大村節代
菊池ひろこ
正木萬蝶
青木鶴城
松宮保人
日高道を
池田雅夫
檜鼻ことは
梅澤輝翠
渋谷さいち
越田栄子
染谷風子
菅原卓郎
池田珪子

次の原稿を募ります。随時発行
所宛、ふるってお寄せください。
なお掲載については、編集部にお
任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽
に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月
を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起
きた面白い話題、めずらしい経験
などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

酔ひ痴るる昭和歌謡や春の宵
 春障子影絵遊びの舞台うら
 寄席跳ねて連れと角打ち朧月
 春の日や巫女の神事の艶姿
 信号の向かうから来る花吹雪
 春暁の出船に夫の握り飯
 首塚をきつと取り巻く春田かな
 欲しきもの夫の相づち春炬燵
 波風の香りたのしむ朧かな
 燕来て軒に傘吊る中華店
 椅子の背にリュックを吊るす新社員
 薄紙の仕切る宴や春障子
 清明や暁の中走る人
 閉店の「お知らせ」しとど春の雨
 カンバスに浅葱下塗り草萌ゆる
 土筆摘む探しあてたる群生地
 かけ慣れぬ市外局番新社員
 八重桜造幣局のしんがり

倉田星歩
 寺町知子
 皆川更穂
 反町修
 石関六弦
 綿引まりこ
 秋谷風舎
 本橋稀香
 丸屋詠子
 飯田忠男
 森下山菜
 阿部幸代
 元田亮一
 田中弘子
 杉浦千祐
 川島夕峰
 室井早都子
 平野楽

水明例会案内	句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	菅小 原林 卓京 郎子
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	山青 中木 どり 鶴城
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明 淵 昇 徹 雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	石井 喜 恵 修 町
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	河野 是 宣 み 子 田
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木 萬 蝶 石 田 慶 子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本 早 苗

水 明 令和八年七月一日発行 毎月一日発行

(第九十九巻 第七号) 定価 一〇〇〇円